公益財団法人 日本ハンドボール協会編　平成26年 2月1日発行（毎月1回1日発行） 通巻541号

ハンドボール

1·2

JAN. FAB. 2014 No. 541

特集

新春インタビュー
川上憲太専務理事に聞く
第21回女子世界選手権
第65回全日本総合選手権大会
男子56回・女子49回全日本学生選手権大会

［表紙写真］全日本総合選手権男子優勝の大崎電気・豊田賢治選手（右）、女子優勝のオムロン・藤井紫緒選手（左）

公益財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/

2014年の年頭にあたり

公益財団法人 日本ハンドボール協会会長　**渡邊 佳英**

新しい年を迎え早やひと月が過ぎました。全国のハンドボール愛好者の皆様には日々健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。また昨年は、日本ハンドボール協会の各事業に対し、ご支援、ご協力を賜りまして深く御礼申し上げます。本年も引き続き、ご支援、ご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年の大きなニュースは、10月28日（月）、カタール・ドーハで開催されたIHF（国際ハンドボール連盟）理事会において、2019年の女子世界選手権の開催地を日本が射止めたことと、9月7日（土）、アルゼンチン・ブエノスアイレスで開催されたIOC（国際オリンピック委員会）総会において、2020年のオリンピック・パラリンピックの開催都市が東京に決定したことです。

昨年の国際大会の成績は、6月にカザフスタンで開催された第12回女子ジュニアアジア選手権において2位となり、本年6月にクロアチアにて開催される第19回女子ジュニア世界選手権の出場権を獲得。8月にハンガリーで開催された第5回男子ユース世界選手権にアンダー世代では28年振りに出場し、結果は17位でした。更に、9月にタイで開催された第5回女子ユースアジア選手権では2位となり、本年7月にマケドニアにて開催される第5回女子ユース世界選手権の出場権を獲得と、アンダーカテゴリーでは、世界を実際に肌で体験した選手達が今後さらに伸びて行ってくれると確信しております。また、12月にセルビアにて開催された第21回女子世界選手権では、“おりひめジャパン”こと女子日本代表が、予選リーグを6チーム中4位で通過し、決勝トーナメントに進出しましたが、初戦のフランスに敗れ、14位となりました。時間はあるようでありません。世界の上位に食い込めるよう課題を一つ一つクリアし、強い、強い日本代表チームを作り上げ、男女ともにまずは2016年のリオデジャネイロオリンピックに是が非でも出場し、熊本、そして東京へと繋げられるよう全力で取り組んで参ります。

このメッセージが皆様のもとに届く頃、男子日本代表チームは、バーレーンにて開催される第16回男子アジア選手権に挑戦しています。清水監督のもとトレーニングを積んだ選手達が活躍し、来年1月にカタールにて開催される第24回男子世界選手権の出場権を獲得してくれるものと信じております。

また、日本ハンドボール協会は、全日本チームの強化はもとより、次世代を担う選手・指導者の育成に向けたNTS（ナショナルトレーニングシステム）、ジュニアアカデミー、がんばれハンドボール20万人会などの各事業を展開しております。引き続き2年後、5年後、6年後の達成目標を見据え、全力で取り組んで参ります。

全国のハンドボール愛好者の皆様、今後とも絶大なるご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

新春インタビュー 川上憲太専務理事に聞く

昨年、相次いでハンドボール界にとって最高に大きなイベントが決まった。ひとつは、9月のIOC総会にて決まった2020年東京開催のオリンピック・パラリンピックであり、後ひとつは、翌10月のIHF総会にて2019年女子世界選手権の開催が決まったことである。遠く、1997年には男子世界選手権が熊本で開催されたが、四半世紀ぶりに日本でハンドボール最大の大会が開催されることになった。現在の日本のランキングは、IHFの公表では男子が20位、女子が13位となっている（2013年12月末現在：IHFのHPより）が、地元枠での参加資格ではあるが、メダル争いに加わることができる力をこの間に付けていくことが、今後の日本ハンドボール界にとって大きな課題である。日本ハンドボール協会は、昨年2月には創設75周年を迎え、又、昨年4月には新たに公益財団法人として生まれ変わり、従来とは異なる組織運営を実践している。今般、協会の陣頭指揮をされている川上憲太専務理事にこれからの日本ハンドボール界の取り組みについて話を伺う機を得た。

昨年9月に東京オリンピックが決まった瞬間はどこでお聞きになりましたか、又、直ぐに頭に浮かんだことは？

東京駅お濠端の東京商工会議所にオリンピック参加の各競技団体が夜の12時に集合し結果を待った。JOC専務理事、プロテニスプレイヤーの松岡修造さんら千名以上が待機していた。結果はだいぶ遅れて早朝の5時頃に決定の瞬間となったが、まず思い浮かんだのは、今までオリンピック予選を勝ち抜けなかったが、選手達を念願のオリンピックに出場させることができると思った。が、次の瞬間には、これからの強化施策や、日本開催に向けた具体的な取組みを考える等、身の引き締まる思いだった。目標は、**メダル獲得**である。

その後、翌10月に女子世界選手権開催が決まりましたが、翌年のオリンピックも控える中、どのような予定を考えられているのでしょうか？

日本協会としては熊本県協会と共に、IHFに対して様々なロビー活動を展開してきた。バーゼルのIHF本部を訪れたり、ヒアリングなどにも積極的に対応してきた結果、開催の運びとなった。熊本県協会の熱い情熱もあり、男子の世界選手権開催にも負けない大会の運営に努めていきたいところである。大会を成功させるには、開催国の活躍は観客の動員等にも好影響を与えること、更には翌年のオリンピックを考えれば強化の施策が最大の課題となることは間違いない。1997年男子の熊本開催では28万人に及ぶ観客を集め、当時としては世界選手権大会では一番の集客であった実績もある。

大会の運営はIHFの大会規約に基づいて全てにおいてIHFがコントロールした運営がされるが、マスコミ・メディア対応など地元開催国としての対応も沢山求められている。昨今は「プレイヤーズ・ファースト」の考え方で、質素且つシンプルなセレモニーとなっており、選手が試合に集中できる運営の傾向である。

2019年開催に向かっては、「招致検討プロジェクト」から「招致準備委員会」へと昨年11月に組織を変えた。今年の2月には第一回準備委員会を開催の予定であり、6月には組織委員会・実行委員会を立ち上げる準備を進めている。その後、12月には基本計画を策定、2015年6月には実施計画の策定、12月にはデンマーク大会の視察、2016年4月には大会運営マニュアルの策定、12月東京・熊本事務局の設置、2017年ムーブメント・イベント開催、ドイツ大会視察、2018年には国際大会・ジャパンカップ開催、そして、2019年にはプレ大会、12月本大会へと繋げていく。

協会としては取り組む課題が多くなりましたが、先ずは何から具体化をしていきますか？

来年には、リオ・オリンピックの予選も控えているが、何れにしろ男女日本代表チームの強化が喫緊の課題である。このために、東京オリンピック強化計画として、**「東京五輪強化指定選手」の編成**を具体化する。コーチ、トレーナーなどスタッフも含めた編成とするが、目標は一つ

であり大学など関連学校の協力も得ながら、「東京五輪強化指定選手」と日本代表チームの相互の関連を充分に取りながら運営をしていく予定である。

次には、**2020東京強化プロジェクトとして「強化戦略プロジェクト」**の立ち上げもしていきたい。強化・環境・サポート・マーケティング／広報・財務・大会運営の６部門が取り分け重要であり、強化に纏わる諸課題に全力で進めていくため、各々、具体的な役割分担や活動計画、目標値を掲げ取り組んでいきたい。又、欧州ハンドボールの年間スケジュールにリンクした形の、日本全体のスケジュールについても検討していく必要があると考えている。

強化以外の活動で、特出した動きは出てきますか？

一つには、レフェリーの育成がある。毎年の事業計画の中でも触れているが、2019、2020年の大会では日本人のペアーが吹笛するのは確実である。現在IHF公認は３ペアの現状ではあるが、世界に進出する環境（資金面・仕事面など）を整え、各カテゴリーの世界選手権で吹笛の経験を一つでも多く実現できるように取り組んでいきたい。

もう一つは、強化事業のための資金手当を含めた、広報、マーケティング活動である。近年はフル代表の活動に加え、ユース、ジュニアなどの大会も増えており、選手個人にも負担を強いる中、一回の遠征では一千万円台の支出となることもあり海外での強化事業には資金面での支援は必須である。協会登録金も昨年アップしたばかりであり、マーケティング活動による財政面での貢献は重要な課題である。

都道府県協会・連盟の活動は益々重要ですが、どのように協調されていくのでしょうか？

まず、都道府県協会・連盟が在っての日本協会である認識を踏まえ、選手を抱えている都道府県協会の役割は益々重要となっている。一昨年から、全国理事長会は10月と２月の年２回開催をして、理事長の役割などを徹底し都道府県協会の活性化を目指している。また各連盟、とりわけ学生連盟、また日本リーグとの意思の疎通を十分に図り、選手強化・大会運営等で協力を頂くよう努力していく。中でも、指導者の存在は重要な役割となることは言うまでもない。国では約4700チームが登録されているが、指導者は約2700名の登録の現状である。先ずは、各都道府県所属の指導者の把握、協会登録や公的資格の取得推進を進めて戴きたいと考えている。

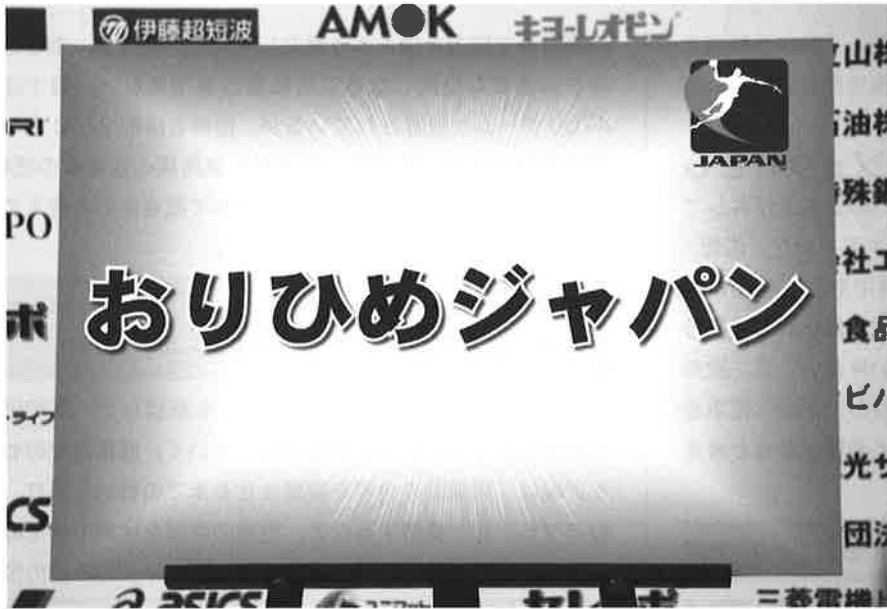
当面の課題として、2016年リオ・オリンピックがあり、アジアを勝ち抜かなくてはなりませんが？

女子は昨年の世界選手権（14位）を総括して、既定の強化路線をどうしていくのか検討をしていく。開幕戦でのセルビア戦は、開催国の会場を震撼させるまでの戦いであり、同組のブラジルが優勝するなど、世界の実感を体験できたのは大きい。監督が掲げる「トータルモビリティ」の一層の飛躍が求められるであろう。

男子は、１月末から開催のアジア選手権兼世界選手権予選の前後で、今まで取り組んできたことと、その結果についての総括が重要となってくる。近年、中東の強化は著しく、韓国ばかりでないアジアのハンドボール地勢を認識しなくてはならないが、何としても世界選手権出場は果たさなければならないと考えている。

有難うございました。最後に専務からハンドボール関係者およびファンへのアピールなどあればお願いします。

2019年、2020年とはっきりとした目標ができた。先程も触れたように、開催国の活躍は大会運営上も必須であり、強くなければ大会そのものも盛り上がりが半減してしまう。2019年の女子世界選手権は、翌年のオリンピックにも大きな影響を与える。2020東京オリンピックの強化計画とリンクさせ、今までにない強力な強化施策が必要となる。日本のハンドボール界にとっては最大のチャンスであり、この機を活かしてハンドボールの普及とさらなる飛躍・発展を実現していきたい。そのためにも、ファンを含めたハンドボール関連者全員で取り組んでいきたい。ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

女子日本代表“愛称”決定!!

昨年の11月22日（金）岸記念体育会館にて、9月30日締め切りで一般募集をしていた女子日本代表の“愛称”発表会及び、12月6日からセルビア・ベオグラードで開催される第21回女子世界選手権参加の女子日本代表チームの壮行会が開催されました。

女子日本代表の“愛称”を募集しましたところ、1,106通の多数のご応募を戴き誠にありがとうございました。この応募内容を参考に、“愛称”を決定いたしました。

選考理由　ハンドボールは、1チーム7人の選手がコート上でプレーする競技。「7」という数字から連想するものの1つに「七夕」があり、「七夕」で女性といえば「おりひめ」。女子代表メンバーがコート上を華麗に、そして優雅に舞い（プレーし）、「天の川」に橋を架けるよう、「世界」につながる大きな橋を架けたい。

“愛称”を発表する多田博副会長

大会参加への意気込みを語る栗山雅倫監督

第21回女子世界選手権女子日本代表選手団

女子世界選手権

21th Women's Handball World Championship

最終順位

金：ブラジル
銀：セルビア
銅：デンマーク
4位：ポーランド
5位：ノルウェー
6位：フランス
7位：ドイツ
8位：ハンガリー
9位：スペイン
10位：ルーマニア
11位：モンテネグロ
12位：韓国
13位：オランダ
14位：日本
15位：チェコ
16位：アンゴラ
17位：チュニジア
18位：中国
19位：アルゼンチン
20位：コンゴ
21位：パラグアイ
22位：アルジェリア
23位：ドミニカ
24位：オーストラリア

ブラジルはヨーロッパ以外のチームでは、1995年の韓国以来の優勝国となりました。決勝戦の会場に詰め掛けた、19,467人のファンの前で、地元セルビアを下し見事優勝を勝ち取り、勝者の台でサンバを踊りました。決勝戦では、セルビアに対し、22対20でのスコアで優勝しましたが、終了5分前には、19対19の同点に追い付かれる場面もありましたが、セルビアは20対20以後2つの決定的なシュートを外し、勝利の女神はブラジルに微笑みました。

All Star team

Goalkeeper：Barbara Arenhart（ブラジル）
Left wing：Maria Fisker（デンマーク）
Left back：Sanja Damnjanovic（セルビア）
Centre back：Anita Görbicz（ハンガリー）
Right back：Susann Müller（ドイツ）
Right wing：Sun Hee Woo（韓国）
Pivot：Dragana Cvijic（セルビア）

MVP：Eduarda Amorim（ブラジル）
得点王：Susann Müller（ドイツ／62点）

派遣選手団

役職	名前	
団長	川上憲太	公益財団法人　日本ハンドボール協会
チームリーダー	津川　昭	公益財団法人　日本ハンドボール協会
監督	栗山雅倫	公益財団法人　日本ハンドボール協会
コーチ	小籔憲次	公益財団法人　日本ハンドボール協会
ドクター	永澤雷太	函館五稜郭病院
トレーナー	高野内俊也	一般財団法人　日本予防医学協会
情報分析	横山克人	公益財団法人　日本ハンドボール協会

№		背番号	名前	所属	出身校
1	GK	1	飛田季実子	ソニーセミコンダクタ	大阪福島女子高校
2	CP	2	増田寛那	広島メイプルレッズ	大阪教育大学
3	CP	3	高橋　恵	ソニーセミコンダクタ	筑波大学
4	CP	4	上町史織	北國銀行	国士舘大学
5	CP	7	錦織　新	ソニーセミコンダクタ	盛岡大学附属高校
6	CP	9	横嶋かおる	北國銀行	高岡向陵高校
7	CP	10	藤井紫緒	オムロン	東京女子体育大学
8	CP	13	勝連智恵	オムロン	宣真高校
9	GK	16	白石さと	東京女子体育大学	四天王寺高校
10	CP	17	東濱裕子	オムロン	陽明高校
11	CP	18	田邉夕貴	北國銀行	大阪体育大学
12	CP	19	池原綾香	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
13	CP	20	石立真悠子	オムロン	筑波大学
14	CP	21	早船愛子	三重バイオレットアイリス	筑波大学
15	GK	22	藤間かおり	オムロン	大分鶴崎高校
16	CP	24	原　希美	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
17	CP	26	川村杏奈	東海大学	浦和実業学園高校
18	CP	28	永田しおり	オムロン	福岡女子商業高校

ハンドボール女子世界選手権開催国と開催国の成績

回数	開催年	開催地	参加国	優勝	開催国の成績	日本の成績
1	1957.7.13-20	ユーゴスラビア	9	チェコスロバキア	3位	不出場
2	1962.7.7-15	ルーマニア	9	ルーマニア	優勝	9位
3	1965.11.7-13	西ドイツ	8	ハンガリー	3位	7位
4	1971.12.11-19	オランダ	9	東ドイツ	8位	9位
5	1973.12.7-15	ユーゴスラビア	12	ユーゴスラビア	優勝	10位
6	1975.12.2-13	ソ連	12	東ドイツ	2位	10位
7	1978.11.30-12.10	チェコスロバキア	12	東ドイツ	4位	不出場
8	1982.12.2-12	ハンガリー	12	ソ連	2位	不出場
9	1986.12.4-14	オランダ	16	ソ連	10位	14位
10	1990.11.24-12.4	韓国	16	ソ連	11位	不出場
11	1993.11.24-12.5	ノルウェー	16	ドイツ	3位	不出場
12	1995.12.5-17	オーストリア・ハンガリー	20	韓国	ハンガリー：3位　オーストリア：8位	13位
13	1997.11.30-12.14	ドイツ	24	デンマーク	3位	17位
14	1999.11.29-12.12	デンマーク・ノルウェー	24	ノルウェー	ノルウエー：優勝　デンマーク：6位	17位
15	2001.12.4-16	イタリア	24	ロシア	17位	20位
16	2003.12.2-14	クロアチア	24	フランス	14位	16位
17	2005.12.5-18	ロシア	24	ロシア	優勝	18位
18	2007.12.2-16	フランス	24	ロシア	5位	19位
19	2009.12.5-20	中国	24	ロシア	12位	16位
20	2011.12.2-18	ブラジル	24	ノルウェー	5位	14位
21	2013.12.6-22	セルビア	24	ブラジル	2位	14位
22	2015	デンマーク	24			
23	2017	ドイツ	24			
24	2019	日本	24			

報　告

選手団団長　川上憲太

2013年12月6日（金）から第21回女子ハンドボール世界選手権大会がセルビアにて開催されました。大会は12月6日（金）よりセルビアの4都市、ベオグラード、ニシュ、ノヴィ・サド、ズレニャニンでA・B・C・Dの予選グループに分かれて開始されました。予選リーグ各グループ6チームの内、4位以内に入ったチームがベスト16の決勝トーナメントに進出となりました。

日本はアジア地域代表枠3チームのうちの1カ国として参加しました。なんと本大会のオープニングゲームに開催国・セルビアチームが選んだのは日本チームでありました。日本チームは栗山監督以下、大会前にフランスで行われた国際大会に出場して、大会に臨みました。

オープニングゲームのセルビア戦はBグループ開催のニシュ市の4,000人収容の体育館で行われ、会場はほぼ満員、完全アウェイの状況で試合開始。本大会に満を持して挑んだ栗山「おりひめジャパン」は、積み上げてきた栗山監督の掲げるトータルモビリティが浸透し、強いディフェンスを中心に前半は13対10で折り返し、後半も日本リードで試合が展開され場内は静まりかえる場面もあり、あわやというところまで追い込みましたが、2点差で惜しい敗北でした。なんとこのセルビアチームが決勝まで進出。ブラジルとの決勝戦は敗れて2位となりましたが、19,000人の会場が超満員で大会は最高の盛り上がりを見せました。詳しい試合内容はスタッフの報告をお読み頂きますが、Bグループ・ブラジル戦、デンマーク戦においても内容は本当に悔しい戦い、惜しい戦いが続きました。アジア選手権では敗れた中国に完勝。アルジェリアにも勝利し、2勝3敗の4位で決勝トーナメントに進出。決勝トーナメントでは黒木セルビア大使ご夫妻（奥様はフランス人）に応援を頂き、フランスとの戦いとなり、ここでも悔しい敗北となりました。大会規定により、順位は14位となり、本大会を終えました。

日本チームはベテランと若手という構成の中、栗山監督の描くチームコンセプトを選手が充分理解し、激しい、強いディフェンスを中心にチームワークの優れた戦いを展開しました。若手の底上げ、攻撃力のアップ等課題はありますが、リオデジャネイロオリンピックに確かな手応えをつかんだと思います。大会では予選Bグループで戦ったセルビア・ブラジル

が決勝で戦い、デンマークが3位、なんとベスト4に3チームが残るという状況でした。Bグループの惜敗の中で何か「世界のトップ」が見えたという実感が選手の中に残ったことは、これからの強化に大変重要なポイントとなると思います。

2019年12月の女子世界選手権日本開催が決定した直後の大会であり、日本の戦いぶりをIHF幹部も注目していました。大会招致のポイントの一つであった強化の部分については、一定の評価が得られました。しかし、IHF競技委員長（COC）レオン・カリン氏からは「更なる強化」を期待されました。

2019年の大会までには次の2015年デンマーク大会、2017年ドイツ大会がある訳ですが、今回第1回の視察団として日本協会・市原副会長、西窪常務理事、熊本県協会から島田会長他2名が参加され、予選ラウンドから参加の私も含めてチェックポイント（入国・ADカード・輸送・ホテル・練習・試合・チーム係・食事・セキュリティ・イベント・スポンサー・観客・TV・プレス対応・ドーピング・試合会場・VIP対応・スポンサー対応・IHF理事会・出国等）の状況確認を行いました。（別途レポート作成）

開催国セルビアの躍進もあり、セルビア戦では過去女子の世界選手権の一試合での観客数の記録が大幅に更新されました。19,000人収容のベオグラードアリーナが17,000～18,000人の大観衆で埋まり、大変な盛り上がりを見せました。但し、他の国の試合では非常に少ない観客であったのも事実です。その他、開会式（オープニングセレモニー）・閉会式・レセプション（特になし）等については、大変シンプルにローコストで対応していたように思われました。1997年男子世界選手権熊本大会の時と比べるとIHFの大会規約も確立され、IHF主導型で運営システムそのものもシンプルになっていると感じました。今後の進め方の上で大変参考になりました。

華やかな女性の戦い・第21回女子世界選手権セルビア大会の中で、日本チームが確実につかんだ自信を基に、栗山ジャパンがリオを目指して精進をしていくことに皆様のご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

世界選手権を終えて

日本代表女子チーム監督　栗山 雅倫

2013年12月、今年度の最大のイベントである世界選手権大会が、ハンドボールのメッカの一つ、セルビアの地で開催され、日本代表チームとして参加させて頂くことが出来ました。ご関係の皆様方に深く感謝申し上げます。今回は、皆様から頂戴した愛称“おりひめジャパン”の門出となる大会とあって、皆様の思いを強く感じつつ、いつもとは違う緊張感で現地入り致しました。

セルビアは、旧ユーゴスラビアの中心地であり、ハンドボールの熱狂的なファンが非常に多い地でありました。それを裏付けるように、毎日の観客動員数は、近年まれに見るものであり、特にセルビア戦での観客の熱狂ぶりは、凄まじいものがありました。このような地で、ナショナルチームが経験させて頂いたことは、試合そのものも含め、今後の活動に向けて計り知れないものになると感じております。

それでは、試合のご報告をさせて頂きます。結果的に、日本が所属したグループの上位3チームがメダルを獲得するという、珍しい選手権となりましたが、やはり予選からの1試合1試合が、とてもタフなゲームとなりました。

初戦のセルビア戦、地元チームとのオープニングゲームでは、日本ボールになるたびに会場中からブーイングを浴びせられる格好となり、これ以上無いアウェーのゲームを経験致しました。チームメンバーにとって、世界選手権で地元チームとのオープニングゲームを経験出来ることだけでも貴重なものであり、それがセルビアという、ハンドボール文化の色濃い国での経験とあれば、生涯一度といっても過言でない経験をさせて頂いたと感じております。このようなゲームを勝ち抜いてこそ、世界のトップに辿り着くのだと、痛感致しました。結果は、前半のリードを活かしきれず、2点差での敗戦となりましたが、次の試合につながる感触を得たゲームとなりました。

第2戦のデンマーク戦、前回の世界選手権のこともあり、非常に警戒された状態で、試合当日を迎えました。試合前からデンマークのメディアから質問攻めに合うなど、デンマークでの注目ぶりも相当高かったとのことで、試合開始からヒートアップする展開となりました。デンマークは、小柄ながら、強さとうまさを兼ね備えたゲームメイカー、クリスティーナ・クリスチャンセンを中心とした布陣で臨み、一方日本はエース藤井を擁し、石立がゲームをリードする展開となりました。結果、後半40分過ぎまで一進一退を繰り返したものの、最後には速攻で押し切られての敗戦となりました。

第3戦、前回のアジア選手権で惜敗を喫した相手、中国との対戦、予選突破に向けて是が非でも取りたいゲームでした。中国は今大会平均身長ナンバーワンであり、一方の日本は最も平均身長の低いチームであったため、ある意味注目のカードとして報道されました。結果、ディフェンスから速攻が良く機能し、危なげなく勝つことが出来ました。今後のアジアでの戦いを見据えた上でも、貴重な勝利になったと感じています。

第4戦は、世界チャンピオンに輝いたブラジルとの対戦、ここでも防御が良く機能し、面白い展開が続きながらも、最後にはブラジルのダイナミックさに押し切られるように敗戦を喫しました。

予選最終戦の相手国、アルジェリアは高い身体能力をベースとして試合を展開してきましたが、後半の突き放す時間帯があり、無事勝利し、予選突破を決めました。この試合では、若手も活躍した時間帯があり、これからの世代に向けても貴重な経験となりました。

決勝トーナメントではAグループ1位のフランスとの対戦となりました。大会前には優勝候補の一角と囁かれていただけに、やはりタフなゲームとなりました。これまでの大会では圧倒されることも多かった対戦相手でしたが、後半途中までリードすることもありましたが、最後には底力を見せつけられるように敗戦を喫しました。

大会を終えて、結果14位と前回世界選手権と同じ順位となりました。ヨーロッパのチームに勝利することが出来ず、世界のトップに名乗りを上げるためには、まだまだ課題があることを再確認させて頂きました。その一方で、世界のトップチームと対等に戦える局面も増えてきており、これをひとつのきっかけに、より一層の精進を進めてまいります。

我々チームがお預かりした課題である“リオ・オリンピックの切符獲得”に向けて、重要な強化のピリオドとなる2014年を迎えるにあたり、今回の世界選手権では、戦うベースを確認することを一つの目的と致しました。その意味では、多くのヒントが得られた大会であったと感じております。我々の最大のライバル国である韓国も、この大会で強さを示しております。韓国のナショナル強化は、より一層のエネルギーを注いでいるようです。我々も一歩たりとも引く訳には行きません。皆様方と共に、“力強い強化”を力強く推進してまいりたいと思います。今後とも、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

世界選手権を終えて

原　希美

12月6日から24日までセルビアで世界選手権が行われました。ベスト8を目指し、今大会に望み、オープニング戦として迎えたセルビア戦では、スタートから日本のスピードにセルビアが対応出来ておらず、日本のペースで試合を展開できていました。しかし後半の終盤で相手の勢いに押され、それを食い止めることが出来ず、26対28で敗れました。次のデンマーク戦もスタートの入りは良かったものの、守りの徹底が出来ず、最後まで粘りきれずに25対29で敗れました。次の中国戦では、機動力のあるディフェンスで相手の攻撃を封じ、攻撃でも揺さぶりのある攻めをすることができました。後半、足が止まる時間帯があり、相手に連取される場面もありましたが、33対27で勝利することができました。ブラジル戦では、終始相手に圧倒され、なかなか日本の持ち味が出せず、足が止まってしまう時間帯が多く、勝ちきることができませんでした。アルジェリア戦では、スタートの入りは悪かったものの、ディフェンスから速攻の展開で得点を重ね、32対23で勝利し、予選リーグ4位で決勝トーナメントへ進出しました。

決勝トーナメントでは、Aグループ1位のフランスと対戦し、日本の機動力のあるディフェンスで相手の猛攻を守り抜きましたが、なかなか得点に繋ぎきれず19対27で敗退し、14位で今大会幕を閉じました。

課題として、どの試合も後半で足が止まり、自分達の得点がない時間帯が長く続き、体力や戦術の強化をしていかなければいけないと思いました。今大会を通して、十分日本が世界に通用する事、世界の頂点を狙える事、小さくてもやれるということを強く感じました。個人的には、試合に出るチャンスをたくさん頂き、自分でも通用するんだ！と自信になった事もあれば、世界で戦っていくために自分に足りないものをたくさん見つけることができました。特に、自分の良いパフォーマンスを発揮するのに試合ごとで波があり、先輩方との集中力の差が目立った大会だと思います。常に自分自身でスイッチを入れ、プレイに波のない選手になれるよう、今大会の反省を次に繋げていきたいと思います。

最後になりましたが、今大会時差があるのにも関わらず、応援して下さった皆様、また私たちの為に練習して下さった高校生や大学生には本当に感謝しています。ありがとうございました。

世界選手権を終えて

石立　真悠子

まずは大会前に「おりひめジャパン」という素敵な愛称をいただきましたことに感謝申し上げます。

改めて多くの方々が代表チームを応援してくださっていることを感じました。そして、私たちが結果を出し、ハンドボールの顔として普及活動にも尽力していかなければならないと身が引き締まる思いです。

2013年度は夏にドイツ・デンマーク遠征を行い、大会前には国内で男子高校生、大学生との合宿を経て、フランスで行われたフランス・ルーマニア・チュニジア・日本の4カ国が参加したカップ戦に出場。怪我人がいながらも良い準備をして挑むことができました。

日本の組み合わせはセルビア、ブラジル、デンマーク、中国、アルジェリアでした。開催国セルビア、前回大会の予選リーグでその力強さとスピードに圧倒されてしまったブラジル、決勝トーナメントでずっとリードを保っていたにも関わらず、残り3秒で追いつかれ延長で負けてしまったデンマーク、アジア選手権で準決勝で負けた中国、因縁の相手ばかりでした。

「良い試合」ではなく「勝ち」にいきたいとスタッフ・選手ともに同じ気持ちで戦いました。

決勝トーナメントには進んだものの、ベスト4に入ったセルビア、ブラジル、デンマークといずれも2点差、4点差で負け、前回を超えることはできませんでした。

日本代表としては結果を出さなければ意味がありませんが、以前は歯が立たなかった相手とも対等に戦えるという実感が湧いてきました、しかし、長年の課題である後半の戦い方、点差は縮まったとはいえ勝つまでには到らなかった事実、壁もまだ大きく立ちはだかっています。

また、海外の選手と比べ、個々の自立、力強さが足りないこと、コート上だけではなく言葉や表現力など堂々と世界でわたりあっている選手たちとの差も感じています。

自分達の肌で感じとった経験、そして世界との差をひとりひとりが真摯に受け止め、日本代表の課題として取り組んでいきたいと思います。そして必ずや、リオオリンピックの舞台に立てるよう精進して参ります。

今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いするとともに、今回の大会に臨むにあたり多くの関係各位のご尽力に心からお礼申し上げます。

戦　評

■12 月 6 日：B グループ

日本　26（13 − 10、13 − 18）28　セルビア

世界選手権予選の初戦は、地元セルビアとの対戦。完全アウェイの中、前半日本は田邉、東濱の連続得点で 2 対 0 と好調な立ち上がりをみせる。その後、相手に 2 連取され同点とされるが、すぐに 2 連取しペースをつかむと 1 点返された後 4 連取し 17 分 8 対 3 とリード広げる。ここでセルビアはタイムを要求。タイム後落ち着きを取り戻したセルビアが 4 連取し一気に差をつめ、23 分 8 対 7 と追い上げをみせる。しかし日本はここで DF で踏ん張り、ペースを再び取り戻すと 3 連取し 26 分 11 対 7 とする。その後日本は 7mT チャンスを決めきれず差を広げきれず前半を 13 対 10 で折り返す。

後半立ち上がりから一進一退の攻防が続き中々試合が動かないまま 7 分過ぎ、セルビアは日本のミスから速攻につなげ一気にペースをつかむと 5 連取され、13 分過ぎ 18 対 17 とこの試合初めてリードを奪われる。ここから 1 点差の攻防を続け日本はなんとか食らいつく。しかし 19 分過ぎ相手に 3 連取され 22 分 21 対 25 とリードを奪われる。終盤日本は 3 連取したが 26 対 28 で試合終了。

［個人得点］藤井：7 点、横嶋：6 点、東濱：5 点、田邉：4 点、高橋・上町・勝連・石立：1 点

■12 月 8 日：B グループ

日本　25（13 − 13、12 − 16）29　デンマーク

世界選手権予選リーグ 2 戦目は強豪デンマークとの戦い。前半、お互いに決め手を欠き、なかなか点が入らず緊迫した立ち上がりとなる。4 分過ぎ、デンマークが先制点を取り試合が動き出す。日本は横嶋のポストシュートが連続で決まり 2 対 1 と逆転する。そこから一進一退の攻防が終盤まで続く。日本は 22 分から 4 連取し 11 対 9 とリードを広げるが、29 分から 2 連取され 13 対 13 と同点で前半を折り返す。

後半立ち上がりから、お互い点を取り合いなかなか点差がつかない展開が続く。しかし 11 分過ぎ日本の足が止まり出しデンマークが 4 連取、18 分過ぎから 3 連取され 20 分 19 対 25 とリード奪われる。なんとか反撃にでたい日本だったが、相手 GK の好守もあり点差をつめることができない。終盤日本は速攻で 2 連取はしたが 25 対 29 で試合終了。

［個人得点］藤井：6 点、横嶋・石立：5 点、田邉：3 点、増田・上町・錦織・東濱・早船・原：1 点

■12 月 10 日：B グループ

日本　33（16 − 12、17 − 15）27　中国

世界選手権予選 3 戦目はアジアのライバル中国との対戦。前半、中国に先制点を奪われるが直後に日本は 5 連取し 8 分過ぎ 5 対 1 とリードを広げる。その後中盤にかけ一進一退の攻防が続き、なかなか点差がつかない重たい展開となる。21 分過ぎ中国に 2 連取され 11 対 10 と 1 点差まで追い上げられるが、そこから上町の 7mT、田邉、高橋のサイドシュートが決まり 3 連取し 24 分 14 対 10 とリードする。その後互いに点を取り合い 16 対 12 で折り返す。

後半立ち上がりから、互いに点を取り合い 4 点差を行き来する展開となる。しかし 12 分過ぎから日本は 4 連取し 14 分 26 対 18 と大きくリードを広げる。さらに点差を広げたい日本だったが足が止まり出し中国に 4 連取を許し 20 分 27 対 23 とつめられた所で日本はタイムアウトを要求。タイム後日本は落ち着きを取り戻し 3 連取、24 分 31 対 24 とリードを取り戻し終盤は安定した試合運びで 33 対 27 で試合終了。

［個人得点］藤井：10 点、石立：7 点、高橋：6 点、東濱：4 点、田邉：3 点、横嶋：2 点、上町：1 点

■12 月 11 日：B グループ

日本　20（8 − 12、12 − 12）24　ブラジル

世界選手権予選 3 戦目は強豪ブラジルとの対戦。前半、日本は 4：2DF をしかけブラジルの攻撃を揺さぶりにかかる。ブラジルはなかなかペースが掴めずにいたが、日本の OF も思うように点がのびずロースコアの展開が続く。しかし 13 分過ぎ 5 対 5 から相手に 3 連取され主導権を持っていかれる。22 分石立・田邉の連続得点で 22 分 7 対 8 と 1 点差まで詰め寄るが終盤 3

連取され 8 対 12 で折り返す。

後半、上町が 7mT を決め好調なスタートを切るが、ブラジルの直線的な攻撃に徐々に足が止まり失点してしまう。しかし 7 分過ぎこの日好調な飛田のセーブからリズムを取り戻し 3 連取し 11 分 13 対 15 と追い上げをみせる。一気に同点・逆転を狙いたい日本だったが、ブラジルの圧倒的な攻撃陣を止めきれず中盤以降連続失点を繰り返し、徐々に点差を広げられる。19 分 14 対 18 とされたところで日本はタイムアウトを要求。タイム後リズムを取り戻したい日本だったがブラジルの勢いを止める事ができず 25 分 16 対 23 と差を広げられた所で、後半 2 回目のタイムアウト。ここから日本は意地を見せ 4 連取し 28 分 20 対 23 と 3 点差まで追い上げるが終了間際スカイプレーを決められ 20 対 24 で試合終了。

［個人得点］ 藤井・田邉：4 点、上町：3 点、横嶋・東濱・石立・早船：2 点、原：1 点

■ 12 月 13 日：B グループ

日本　32（16 － 12、16 － 11）23　アルジェリア

世界選手権予選最終日は予選突破をかけアルジェリアとの対戦。前半、日本は横嶋のポストシュートが決まり先制点を奪うが、アルジェリアも 18 番のエースにボールを集め対抗し一進一退の攻防が続く。7 分過ぎ日本は 3 連取し 7 対 3 とリードを奪いリズムを取りたいところを 18 番のエースに決められなかなか主導権が奪えない。しかし相手のイージーなミスにも助けられ点差を詰められることはなく終盤 2 連取し 16 対 12 で折り返す。

後半、日本は本来の機動力が働き出し一気に点差を広げ 4 分すぎから 5 連取し 8 分 23 対 13 となる。中盤以降は、選手を入れ替え若手中心のメンバーで挑んだ日本は 16 分から 3 連取し 20 分 29 対 16 と大きく引きはなす。終盤ミスで失点してしまう場面もあったが 32 対 23 で試合終了。

［個人得点］ 藤井・原：6 点、石立：5 点、増田・上町・横嶋・田邉：3 点、川村：2 点、高橋：1 点

■ 12 月 15 日：Eight Final 6

日本　19（9 － 12、10 － 15）27　フランス

世界選手権決勝トーナメント準々決勝はフランスとの対戦。前半、日本は先制点を許すがすぐに東濱の得点で追いつく。日本の機動力を活かした DF が機能しフランスの攻撃を押さえ込む。しかしフランス DF も固くお互いなかなか得点がのびず 20 分 5 対 5 とロースコア展開となる。しかし終盤日本はパワープレーを活かせず、逆に失点してしまい 9 対 12 で折り返す。

後半、日本 4 連取で 13 対 12 とフランスをリードする最高の立ち上がりを見せる。8 分フランスに 2 連取され 15 対 14 とリードを奪い返されるが、日本はここから 3 連取し 11 分 17 対 15 と 2 点差とする。しかしここからフランスの猛攻にあい 10 連取され一気に試合を決められ 19 対 27 で試合終了。

［個人得点］ 藤井・東濱：5 点、高橋：3 点、田邉・石立：2 点、上町・錦織：1 点

平成25年度

第65回全日本総合ハンドボール選手権大会

大崎電気は3年振り11回目の優勝
オムロンは3年連続16回目の優勝

■最終順位

【男子】		【女子】	
優　勝	大崎電気	優　勝	オムロン
準優勝	大同特殊鋼	準優勝	北國銀行
3　位	湧永製薬	3　位	ソニーセミコンダクタ
	トヨタ車体		広島メイプルレッズ

	【男子】	【女子】
最優秀選手賞	豊田賢治（大崎電気）	藤井紫緒（オムロン）
最優秀監督賞	岩本真典（大崎電気）	黄　慶泳（オムロン）

大会を終えて

愛知県ハンドボール協会理事長　矢野 哲二

男子優勝、大崎電気。女子優勝、オムロン。チームの皆様優勝おめでとうございます。

「第65回全日本総合ハンドボール選手権大会」は12月24日（火）～12月28日（土）まで愛知県体育館・枇杷島スポーツセンターで開催し無事終了することができました。ご支援、ご協賛いただきました関係団体、関係各社、報道各社、また会場に足を運んでいただきましたファンの皆様に感謝を申し上げます。

1950年の第1回大会を愛知県で開催しています。そして今回は7年ぶり6回目の開催となりました。前回第58回大会では地元男子大同特殊鋼が優勝しました。今大会は愛知県勢同士の決勝戦をと期待をしておりましたが残念ながら叶いませんでした。ただ、大会期間中に「第22回JOCジュニアオリンピックカップハンドボール大会」に愛知選抜女子が優勝との朗報がもたらされ、大会運営に追われるなか安堵感のような感激を覚えました。

試合は男子大崎電気、女子オムロンの優勝に終わり、男女準々決勝では大学勢の健闘もありましたが準決勝は昨年同様の4チームとなり、男女リーグ勢の力を見せつけた結果になりました。

大会運営につきまして、名古屋市内でコートが2面取れる会場はなく、2会場での開催となり、準備・競技役員の確保に苦労いたしました。競技役員の補助役に高校生をあて乗り切ることができましたが、人員不足もあり受付などで担当役員の方にご苦労もお掛けいたしました。会場の狭さから、各会場とも選手の皆様にはアップ会場・更衣室にご不便をお掛けし申し訳なく思います。またTDにつきましては基本的に開催地でということで、事前に研修会も行い対応してきましたが、実際には試合経験が少ない者もいて、若干不備なところもあり課題を残しました。今後は審判員の研修会と同様に、TDのレベルアップの研修会の開催を行っていきたいと考えます。今回の大会は競技運営を中心に準備してまいりました。従来から改善した点は、記録用紙を複写の物から、記載間違いを減らすためにエクセルで書式を作成し、それに選手名等を入力し、打ち出して使用することにしました。また結果記録の処理、速報、報道機関への対応等も順調に行うことが出来ました。

過去の開催経験があるとはいえ、競技運営以外の面では反省点が多くありました。一つは集客です。多くの方からもご指摘を受けましたが、事前大会告知方法、集客増の取り組み企画、大会グッズ販売等、もっと観客席を埋め尽くす方策を…。他にも入場者への判り易い案内表示、報道関係者への対応等、課題は多く残りました。

平成26年度は第4回全日本社会人選手権大会、第16回全日本ビーチハンドボール選手権大会、第34回全国クラブハンドボール選手権大会・中地区大会、第66回全日本総合ハンドボール選手権大会、第38回全国高等学校ハンドボール選抜大会と5つの全国大会が愛知県での開催が予定されています。

今回の全日本総合での反省を活かし、より良い大会運営を心掛けていきたいと考えています。これからも皆様のご協力、ご支援をお願いし大会総評とさせて頂きます。

男子優勝　大崎電気

第65回全日本総合ハンドボール選手権大会を振り返って

大崎電気ハンドボール部監督　岩本 真典

はじめに、第65回全日本総合ハンドボール選手権大会を開催するにあたりご尽力いただいた愛知県ハンドボール協会、（公財）日本ハンドボール協会、ならびに関係各位の皆様に改めて心より厚く感謝、御礼申し上げます。

この度、私たち大崎電気は第65回全日本総合ハンドボール選手権大会において3年ぶり11回目の優勝を果たすことが出来ました。

これも一重に日頃から大崎電気ハンドボール部を支えてくださっている渡邊オーナーをはじめ、社員の皆様、そして多くのファンの方々や大崎電気ハンドボール部関係各位の皆様の力があってこその結果だと思っております。この場を借りて感謝申し上げます。

そして何より優勝という文字に飢え、日々のトレーニングにおいて切磋琢磨し選手間での競争を闘い抜いた22名の選手の努力の賜物だと思っています。

選手には日頃から FOR THE TEAM! THINKING HANDBALL! というチームスローガンの基、指導しております。

今大会は18名大会登録（16名ベンチ登録）しか出来ず、大会が始まれば怪我をしても選手の入れ替えが2名しか出来ないという中、決勝戦までの3試合、試合に出場している選手は勿論ですが、ベンチ登録を外れた6名の選手もチームの為に最善を尽くし、選手22名がひとつになって大きな力を発揮し、役割を果たしてくれたことに感謝しております。

しかし､これを継続しなければ意味がないと思っています。

今大会は大崎電気として3年振りの優勝でしたが、今期の最終目標である次のタイトルに向けて、この優勝をステップに継続して優勝できるよう、これまで以上の努力を重ねて22名の選手、誰が出場してもチーム力が落ちないチームを目指し、国内で継続して勝てるチーム、そして世界に通用するチームを目指して日々、精進していきます。

今後ともご支援、ご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

そして大崎電気ハンドボール部をこれからも宜しくお願い致します。

女子優勝　オムロン

全日本総合選手権大会優勝について

オムロンハンドボール部ヘッドコーチ　黄　慶泳

第65回全日本総合選手権大会で3年連続16回目の優勝が出来て本当に心から喜んでおります。やはり優勝の原動力は試合会場で熱い声援を送って下さった皆様方の力があり、様々な角度から沢山サポート、ご支援があったからだと思います。関係者の皆様方には心から厚くお礼申し上げます。

今大会の準備については、直前まで女子世界選手権大会があり、代表選手達が約1ヶ月間チームを離れていた為にチームの調整が容易ではありませんでした。しかし、選手達は良くワンチームで戦ってくれたと思います。少ない準備期間中のトレーニングでは、①チームに残っていた選手と代表選手が違和感なく一つになれる為の努め②代表選手達のコンディション調整と日本の細かい戦いに切り替えられるようなトレーニングメニューの選択③明確な目標を持つこと、等々にポイントを置いて準備しました。

今年はオムロン創業80周年と記念の年でもあります。大会で優勝することで、ハンドボールが会社に少しでも貢献できればとの強い思いを持って戦ってくれたことも、チームに最後の粘りを与えてくれた一つの要因であったと考えます。

大会の結果については、優勝することは出来ましたが、オムロンが理想とする戦いでは無かったと感じます。全体的に各試合で得点は取れていましたが、決勝では大量失点からハイスコアの試合展開でありました。計算できない勝ち方で、やはり残り日本リーグの戦いで勝ち進むためには守りの強化は欠かせないことであると感じます。若手と中間層の選手たちも役割を徐々に理解してきているので、さらに総合力を上げながら日本リーグの優勝に向けて全力を尽くしたいと考えます。

最後になりますが、大会の開催、運営にご尽力頂きました関係者の皆様方には改めて御礼申し上げまして優勝のご報告と致します。本当にありがとうございました。

全日本総合選手権に優勝して

オムロンハンドボール部キャプテン　藤井 紫緒

12月24日から28日まで愛知県で全日本総合選手権大会が行われました。12月6日からセルビアにて開催された世界選手権の為にチームが試合直前まで2つに分かれての強化で不安がある中臨んだ大会でした。

初戦は東京女子体育大学との対戦。スタートから硬さはあったもののディフェンスから速攻で着実に得点を重ね、28対12で勝利。

続く準決勝はソニーセミコンダクタとの対戦でスタートはお互いに点の取り合いになりましたが、ゲームの中で細かく修正ができ相手の攻撃を防ぐことができました。オフェンスでは中盤厳しい時間帯もありましたが、ディフェンスが機能し得点に繋げることができ27対18で決勝へ駒を進めました。

決勝は昨年同様、北國銀行との対戦、国体での雪辱をと臨み、前半はオムロンのディフェンスが機能し自分達のハンドボールを展開でき、15対10で相手の得点を10点で抑えて折り返しました。しかし、後半に入りなかなかディフェンスでリズムが掴めず、得点が止まる時間帯が多くなりましたが、29対25で3年連続16回目の優勝を飾ることが出来ました。

チーム20名がそれぞれの役割を果たしたからこそ得た優勝だと思いますが、決勝戦での攻守の課題を修正します。1月から再開されるレギュラーシーズンの日本リーグで1位を確保し、プレーオフに臨むためにも、更に精進して参りますので今後ともご声援の程宜しくお願い致します。

最後になりましたが、今大会にあたりご尽力頂きました協会関係者の方々、応援して頂いた皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

戦　評

男　子

▼1回戦

大阪体育大学	33（15-6、18-18）24	ＨＣ岐阜
中京大学	23（15-6、8-15）21	長崎社中
早稲田大学	32（11-16、21-10）26	ＨＯＮＤＡ
トヨタ自動車東日本	34（15-16、19-13）29	日本体育大学

▼2回戦

大阪体育大学	28（14-13、14-14）27	北陸電力
琉球コラソン	30（17-7、13-15）22	中京大学
トヨタ紡織九州レッドトルネード	37（16-19、21-12）31	早稲田大学
トヨタ自動車東日本	28（10-9、18-16）25	豊田合成

▼準々決勝

大同特殊鋼	39（22-14、17-17）31	大阪体育大学
湧永製薬	25（17-5、8-11）16	琉球コラソン
大崎電気	46（23-8、23-9）17	トヨタ紡織九州レッドトルネード
トヨタ車体	33（18-9、15-16）25	トヨタ自動車東日本

▼準決勝

大同特殊鋼　30（10-11、20-13）24　湧永製薬

立ち上がり、大同は3番野村のロングシュート、対する湧永は9番佐藤のブラインドシュートが冴え渡り、12分を過ぎ、5対5の同点、両チーム互角のすべり出しとなる。その後は、大同がリードし、湧永が追いつく試合展開が続く。この形勢が逆転したのは25分、3番木村のポストシュートで10対9とこの試合初のリードを奪った湧永は、9番佐藤もカットインで続き11対9、リードを2点に広げる。一転追う立場となった大同も13番加藤のポストシュートで湧永の連続得点を断ち切り11対10、前半は湧永1点リードで折り返した。

後半、さらにリードを広げようとする湧永の前に立ちはだかったのは大同GK12番久保、好セーブの連続で流れを一気に引き寄せる。そして、10分、大同は9番武田が豪快にロングを叩き込み14対13、逆転に成功する。流れを掴んだ大同は、18分、3番野村のロングを皮切りに5連続得点で21対15とリードを6点に広げ勝利を一気にたぐり寄せる。終盤、高い位置からプレッシャーをかけるディフェンスで反撃を試みる湧永であったが、大同の勢いを止めることはできずタイムアップ。GK12番久保の好守が光り、大同が30対24で勝利した。

大崎電気　32（17-17、15-14）31　トヨタ車体

前半は大崎電気3番小澤のスカイプレーでスタート。大崎電気は、14番岩永のロングシュートや、6番豊田の速攻で得点。対するトヨタ車体は、5番高智のミドルシュートや、9番高木のポストシュートなどで得点。両チームとも多彩な攻めで全く譲らず交互に得点を重ね、互角の展開となり、17対17の同点で前半が終了した。

後半開始5分過ぎ、トヨタ車体の退場が続く間に大崎電気が6連続得点し、8分、23対19とリード。その後、トヨタ車体は、5番高智、22番門山を中心に、1点差まで追い上げるものの、大崎電気GK16番木村の好セーブもあり、32対31で大崎電気が逃げ切った。

▼決勝

大崎電気　32（18-12、14-12）24　大同特殊鋼

全日本総合決勝は、大同のスローオフでスタート。大崎 6 番豊田のカットインシュートで幕を開ける。大同もすかさず 10 番岸川のミドルで同点とする。大同は序盤、大崎 24 番信太にマンツーマンでマークするが、大崎の高い個人技に連続得点を許す。点を取り返したい大同だが、大崎の高い壁にシュートを阻まれ、なかなか得点できず、大崎 24 番信太の速攻で 3 対 6 とリードされた前半 6 分にタイムアウトを請求する。タイムアウト後、大同はマンツーマンマークをやめ、3-2-1 ディフェンスにシステムを変更する。そのディフェンスが機能し、粘り強いディフェンスから速攻などによる連続得点で前半 15 分には 9 対 8 と逆転する。しかし、そこから大崎も速攻、ミドルなどで 5 連取し、13 対 9 と再逆転。前半終了間際には 3 番小澤の逆スピンシュートが決まり、18 対 12 の大崎リードで前半を折り返す。

後半は大崎の 3 連取から始まり、リードが徐々に広がる。後半 8 分、9 分には大崎に連続退場があり、大同にチャンスが訪れるが、2 度のノーマークシュートを 16 番木村の好セーブに阻まれ、差を縮めることができない。その後は一進一退の攻防となるが、要所で 16 番木村のスーパーセーブが飛び出し、流れを渡さなかった大崎が 32 対 24 で 3 年ぶり 11 回目の優勝を果たした。

女　子

▼ 1 回戦

東京女子体育大学　23（9-10、11-10）22　ナデシコクラブ
（1-1　延長　2-1）

三重バイオレットアイリス　31（15-5、16-14）19　東海大学

大阪体育大学　28（14-8、14-3）11　HC 名古屋

香川銀行T・H　25（16-7、9-7）14　飛騨高山ブラックブルズ岐阜

▼準々決勝

オムロン　28（14-6、14-6）12　東京女子体育大学

ソニーセミコンダクタ　26（11-6、15-10）16　三重バイオレットアイリス

北國銀行　28（15-12、13-7）19　大阪体育大学

広島メイプルレッズ　26（15-12、11-7）19　香川銀行T・H

▼準決勝

オムロン　27（15-10、12-8）18　ソニーセミコンダクタ

序盤、15 番松本の速攻や 7 番藤井の個人技で得点を重ねるオムロンに対し、リズミカルなボール回しから、17 番錦織のポストシュートなど、セットオフェンスで着実に加点していくソニー。10 分を過ぎ、互いに譲らず、6 対 6 の同点。その後は一進一退の攻防が続き、17 分を過ぎ 9 対 9、なお同点。ここから一歩抜け出したのはオムロン。7 番藤井のサイドシュートを皮切りに 3 連続得点に成功。12 対 9 とこの試合初となる 3 点のリードをつける。対するソニーも、タイムアウトをとり、追撃を図るも、流れはオムロン。24 分過ぎからの 3 連取でさらにリードを広げると、15 対 10。前半はオムロンが 5 点リードで折り返した。

後半立ち上がりは互いに守り合い、ソニー 12 番飛田、オムロン 1 番藤間、両 GK も安定したキーピングでディフェンスを支える。両チームとも得点が伸びなやむ中、じわりじわりとリードを広げていったのはオムロン、11 分には 20 対 11 とリードを 9 点とする。その後も集中力を絶やすことなく、ソニーの反撃を抑え込んだオムロンはリードを守り切り、タイムアップ。27 対 18 で勝利し、決勝戦へと駒を進めた。

北國銀行 28（14-14、14-11）25 広島メイプルレッズ

メイプルのスローオフで開始した試合は、15 番高山のポストで先制。北國は、すぐさま、5 番塩田のクイックスタートで同点とする。その後は、メイプルが 15 番高山のポスト、2 番増田のロングを中心に先行する展開。対する北國は 9 番横嶋か 13 番横嶋彩の姉妹のポスト、カットインを中心に攻撃をし、18 分に同点とする。その後は、速攻からのカットインで連続得点で 2 点のリードを奪う。攻撃のリズムが狂ったメイプルは 24 分に 2 度目のタイムアウトを請求。メイプルは北國のディフェンスに苦しみながらも残り 1 分に 7 番宋のスカイ、ロングで 14 対 14 の同点とし、前半終了。

後半の立ち上がりは、互角の戦い。北國は 6 番石野のミドルを中心に攻撃を組み立てる。対するメイプルは GK16 番田口の好セーブから 3 番高橋らの速攻で得点を重ねる。しかし、20 分過ぎにメイプルの足が止まり始める。その隙に 4 番上町らの速攻で 6 連続得点。この試合最大の 5 点差とする。追いつきたいメイプルはディフェンスラインを高くして反撃を試みる。しかし、ミスも重なって遂に主導権を奪えずに終わった。残り 10 分を切ってからの攻撃の明暗が勝負を分けた。

▼決勝

オムロン 29（14-10、15-15）25 北國銀行

昨年と同じ顔合わせとなった決勝戦。立ち上がり、主導権を握ったのはオムロン、11 番永田のポストシュート、7 番藤井のロングシュートなどで着実に得点し、12 分を過ぎ 7 対 3 とリードする。16 分、その後も得点を重ねるオムロンは 10 対 4 とリードを 6 点に広げる。このままオムロン優位で試合が進むかと思われたが、ここから北國が猛追。11 番翁長のミドルシュートを皮切りに 4 連続得点に成功、22 分には 10 対 8 と 2 点差にまで詰め寄る。しかし、北國に傾きかけた流れを、11 番永田の得点で断ち切ったオムロンは、慌てることなく試合を展開、7 番藤井が 7mT、ロングで確実に得点し、14 対 10。前半はオムロンの 4 点リードで折り返した。

後半、オムロン 7 番藤井にマンツーマンをつけ、オムロンオフェンスのリズムを崩し、追撃のチャンスを狙う北國。しかし、後半立ち上がりもペースを掴んだのはオムロン。巧みなポストプレーや力強いカットインで加点すると、9 分過ぎには 20 対 12 とリードを 8 点に広げる。対する北國も 11 番翁長、13 番横嶋彩、4 番上町などのゴールで粘り強く反撃、25 分には 27 対 23 と、4 点差にまで迫る。残り 5 分、この 4 点差を守り切ったオムロンが 29 対 25 で勝利。抜群の安定感で 3 年連続、16 回目の優勝を飾った。

サイドレポート

SIDE REPORT

1 年を締めくくる大会、平成 25 年度第 65 回全日本総合ハンドボール選手権大会は 12 月 24 日～ 28 日までの 5 日間、枇杷島スポーツセンターと愛知県体育館で競技が行われた。各会場は私が学生時代に戦った舞台であり、アップ会場や近隣にも深い思い入れがあるため、会場に近づくにつれ熱い思いが立ち込めてきた。

全日本総合は日本リーグ、社会人チーム（ジャパンオープンの上位チーム）、大学生（全日本学生選手権の上位チーム）などが対戦できる唯一の大会である。

会場に入ると、スタッフが笑顔で出迎えてくれた。選手たちが心地よく戦えるようサポートをしてくれているのは“コートの外”で戦っている彼らのお陰である。今大会で大きな怪我人や出来事はなかったが、各個人がやるべきことを明確にさせていたスタッフは常に目を光らせながら気を張って仕事をしていた。

もうひとつ、コートの外で戦っている者を忘れてはいけない。それは「応援団」である。地元から駆けつけてきた彼ら。彼らの声は大きく大切なものである。常に声を出し続け、試合終了後には対戦相手にエールを送る姿は、ハンドボールの魅力をさらに高める存在である。

“コートの外”のサポートにより舞台は整っている。あとは“コートの内”で戦う選手たちである。

日本リーグを開催しているチームにとってはスケジュール的に厳しい状況ではあったが、集大成として挑んでくるチーム、リーグや国体、新チームと次へつなげるために各チームそれぞれが思いを込めてこの大会に望んでくる。

決勝は男女ともに第 68 回国民体育大会で勝ち残ったチーム同士の戦いとなった。

女子優勝チームのオムロンは立ち上がりからゲーム展開をうまくコントロールし、安定のある仕上がりを魅せてくれた。

男子優勝チームの大崎電気は前日にトヨタ車体戦で接戦をしたことにより、さらに各個人の持ち味を活かし、ベンチメンバー含め全員で走り切り、会心の試合運びで優勝を手にした。

また優勝できなかったチームは悔しさをバネに残りの日本リーグとプレーオフをどう戦うか楽しみである。

残念なことに昨年の開催地である大阪に比べ観客が集まらなかった今大会。次回も同時期、同会場であることは決まっている。大会でのイベントを工夫してハンドボールが盛んである愛知県らしさを生かし、多くのお客さんが来てくれるよう、また選手の熱闘プラス運営側の小さな気遣い、ハンドボールに対する思いを随所に感じる大会となることを期待したい。

（機関誌専門委員会・長谷川千紗）

TOPIC

横嶋 3 姉妹が全日本総合出場

今回の全日本総合選手権大会で、3 姉妹が同じコートに立つという珍しい出来事があった。現在の少子化の流れの中では、このようなことは最後のことになるのかもしれない。

その 3 姉妹とは、北國銀行の横嶋かおる、横嶋彩選手と大阪体育大学の横嶋遥選手の 3 人である。今回の大会の 2 回戦では北國銀行と大阪体育大学のカードとなり、3 姉妹が同じコートに立つことになった。さらには、北信越国体ではもう一人の姉妹、未来さんを加えて 4 人で同じコートに立ったとのことである。

お姉さんのかおる選手は、今やナショナルチームでも中心的な役割を果たす選手に成長している。先の女子世界選手権にも、日本代表として出場し、最も長い時間プレーし、チームで 4 番目となる 18 得点を記録している。

今回、この大会を横嶋姉妹のお父様、信生氏が応援観戦していた。お父様もハンドボールプレーヤーであり、まさにハンドボール一家の中での出来事であったということができる。

決勝戦の前に、横嶋一家

お父様も名プレーヤーであった。関東学生選抜として、日本韓国学生対抗戦に出場して活躍をなされている。当時は韓国の台頭が著しく、学生界では初めて関東選抜以外の地区学連代表は、勝利をしていない。その様な中での 1 勝は価値あるものであった。メンバーの中には、佐々木、花輪など日本を代表する選手の名前も見られる。

得	【関東学生】			【慶熙】	得
0	佐藤寿	法政	GK	李錦求	0
1	吉近	中央			
4	佐々木	中央	FP	張正穆	0
3	花輪	中央		黄致範	7
2	白石	中央		金允珠	1
2	田上	法政		金栄会	2
2	長谷川	法政		金性洙	1
0	脇若	早稲田		柳在忠	2
0	寄井	日体		韓在愚	0
0	菊池	早稲田		呉徳煥	0
1	横島	東教大			
0	加藤	早稲田			
0	佐藤守	明治			
15		（0）	7MT	（2）	13

昭和 47 年 6 月 17 日、東京体育館

平成25年度全日本学生ハンドボール選手権大会報告

全日本学生ハンドボール連盟　福地 賢介

本年度の学生日本一を競う全日本学生ハンドボール選手権大会は、東西学生選手権大会各地区学連リーグで出場権を獲得した、北海道から九州までの各学連代表の男子32大学・女子24大学が参加し、11月23日から27日までの5日間にわたり、甲斐の国、山梨県甲府市・山梨市において開催された。主管の山梨県協会にとっては、2001年（H13年）に東日本学生選手権大会を開催して以来の、12年振りに学生の大会開催であり、本大会ははじめての開催であった。

東京五輪開催が決定し、リオから東京へのオリンピックロードが敷かれ、これからは、特に、強化が問われる中、男女共に本大会の出場選手である大学生世代が強化の中心となってくるので、その意味でも、2014年8月開催の世界学生選手権大会（ポルトガル）、2015年の韓国開催のユニバシアード大会も含めて、これからのインカレや大学リーグなどが注目されてくる。

そのような中で、主管の山梨県協会と関東学連の協力で運営され、小瀬スポーツ公園体育館・緑が丘スポーツ公園体育館・山梨市民総合体育館において熱戦が展開された。

男子は、早稲田が決勝戦初進出の中京大を破り、25年振り4回目、女子は、大体大が東女体の追い上げを躱し2年振り2回目の優勝で、無事終了する事が出来た。

近年、男女共に各地区学連の実力の接近化が窺えるようになっており、一回戦から好カードの対戦もあった。

5年程前までは、初出場を果たす壁が厚いとされていたが、高校の有力選手の進学分散化も窺え、2010年から本年にかけて、男子で岐阜聖徳大・小樽商大・女子で同志社・大同大・桐蔭横浜大が初出場を果たしており、本年も、男子で駿河台・桐蔭大、女子で小樽商大の初出場校があった。また、古豪と言われる大学などの復活も見られて、2011年の41年振りの明星大・2012年の14年振りの沖国大・19年振りの愛媛大などが見られ、本年も、41年振りの立教大・12年振りの近畿大・10年振りの岐阜大など久しぶりの出場もあって、1～2回戦が行われた23日（土）・24日（日）は、懐かしい顔のOB・OGの応援も目立っていた。因みに、第一回大会からの連続出場は、男子で日体大・筑波大、女子は、東女体・日体大で、昨年まで連続出場であった日女体大が、本年出場権を逃し連続出場記録が途絶えた。

男子は、此処3年間はシード校が順当にベスト4に進出し、日体大の3連覇か、それを何処が阻むか注目されていた。創部75周年の記念の年に、関東学生春秋リーグを制して優勝を狙う早稲田が大体大を破り、昨年・一昨年に続き決勝進出。また、中京大が全員ハンドで日体大を破って、東海勢としては12年振り、自身としては初の決勝戦へ駒を進めた。

GK岩下の堅守を要に、スピード・パワー・高さの早稲田か、中野の好リードから全員ハンドを見せる中京大か注目の一戦なったが、早稲田が、中京大の反撃を抑え優勝を勝ち取った。

女子は、大体大が角南・佐々木・長尾・大山などを擁して何処からでも得点できる安定したチーム力で東海大を圧倒、東女体は笠木のゲームメイクで大型プレーヤーを生かして中京大を破り、夫々決勝戦に進出。

決勝戦は、立ち上がりの攻防で主導権を握った大体大が、常に先手をとり、東女体の反撃を抑えて優勝を飾った。

大会を振り返ると、何時も運営面での人材（競技役員・TD・審判・補助委員）の確保と言った大きな課題があり、ファイナルを土日に持ってくると、1～3回戦の平日開催を余儀なくされ、人材確保が難しいが、今回の様に、土日スタートであると、役員・TD・審判員・補助委員などが、年休や欠勤・授業を欠席する事なく、1回戦24試合・2回戦16試合の運営に対応でき、円滑となる事、更に、1～2回戦で敗退が予想される参加大学の関係者（OB・OG・家族・他）・大会スタッフ同様に欠勤などせず、観戦・応援に来る事、中学生や高校生も欠席せず、多くの大学の試合を観戦できるので、助かると言う声も聞かれて来ている。

今回、3回戦から平日開催時の競技開始時間が10時からであったが、会場利用の都合や交通機関を考慮した場合、可能であれば13時からの開催とか、開始時間の繰り下げで、中学生・高校生の観戦に、一考を要する課題もあった。

最後に、開催に当たり、多くの方々のご支援・ご協力を賜り、無事開催する事が出来ました事を感謝いたし、お礼を申し上げます。

男子優勝：早稲田大学

早稲田大学ハンドボール部主将　岩下 祐太

早稲田大学ハンドボール部は今年、創部75周年という節目の年を迎えました。この節目の年に25年ぶりに全日本学生選手権において優勝し、早稲田大学史上初となる関東学生春季リーグ、秋季リーグを含む“3冠”を達成できたことを非常に嬉しく思っております。この快挙を成し得たのも支えてくださったOB・OGの皆様をはじめとする応援してくださった父母の方々、大会を運営してくださった全ての方々のお陰です。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

今年のチーム発足時に掲げたスローガンは“自律”でした。今年はスタッフの指導のみならず、自分たちで主体的に考え、行動してきました。練習中に学生同士で話す姿や、プレーの面でも自分たちで考えチャレンジしていく姿など、そこに今年1年を通してのチーム全体としての成長が見られました。また昨年よりも自主練習の時間を増やしました。実はインカレ直前の練習も自主練習だったのですが、走りこむ学生や筋力トレーニングをする学生、休を休める学生など、そのときの自分の状況からベストな選択を自分でできたことも今年1年間“自律”というスローガンを掲げてきたチームの成長です。

試合では、一試合ごとに成長することができました。練習の時には気付くことのできなかった自分たちの甘えや弱さが試合に出てしまいましたが、チーム内のミーティングで話し合い、それを基に勝ち進むごとに改善、修正をして、決勝戦に最高の形で臨むことができたのでよかったです。また、決勝の舞台では最高学年である4年生がチームを引っ張っていけたという点が一番の“自律”だと思います。

ここでは終わらずに来年以降も連勝して勝ち進むために、私たちはこのインカレ優勝というタイトルに驕ることなく、誇りを持ってこれからの練習に励みたいと思います。これからも早稲田らしく挑戦し、新しい歴史を積み重ね、塗り替えていく決意です。

女子優勝：大阪体育大学

大阪体育大学女子ハンドボール部主将　角南　唯

王座奪還

平成25年11月23日〜27日、山梨県甲府市で開催された第49回全日本学生ハンドボール選手権大会で2年ぶり2度目の優勝を勝ち取ることができました。昨年の福岡インカレではラスト2秒で逆転され、2連覇を逃しました。あの時のあの悔しさをバネに、私たちはチャレンジャーとして新チームのスタートをきりました。すべてはこの日の為に、楠本先生を信じて辛い練習も耐え抜いてきました。

いよいよ始まった1回戦、2回戦と順調に勝ち進み準決勝の相手は、昨年と同じく東海大学。前半は相手に対して受け身・弱気になっており1点を競る厳しい試合展開となりました。後半が始まると相手にシュートを決められすぐに追いつかれてしまいました。体大は相手にシュートを決められ同点になり、なかなか点差を広げることができませんでしたが後半11分、相手の守りが崩れ出し4点差に。同時に相手に疲れが見え始め、連続速攻で一気に東海大を突き離し11点差をつけ、決勝に繋げることができました。

決勝戦の相手は東京女子体育大学。前半6対0体大ペースに。途中ミスが増え8対6と2点差で折り返し、後半は点の取り合いで厳しい状況が何分も続きましたが、終盤相手に5点差をつけラスト1分。私は涙をこらえることが出来ませんでした。観客席からカウントダウンが始まり「10、9、8…」。試合終了のブザーがなり私達はすぐさま観客席にいるチームメイトのところに駆け寄り喜びを分かち合いました。正直、日本一という実感は湧きませんでしたが、チームメイトと抱き合った瞬間、やってきたことは間違いではなかったという思いで涙が溢れました。

今年は春季リーグ・秋季リーグ・西日本大会で優勝したものの、私自身キャプテンとしてチームを引っ張ること、軸になることが出来ず、チームのみんなを不安にさせてしまったと思います。目標が高い分、のしかかる重圧、プレッシャーは想像以上のもので何度も壁にぶつかりました。しかしそんな時いつも支えてくれたのはチームの皆、そして家族でした。みんなには本当に感謝しています。私は、この4年間楠本先生の元でハンドボールをやってきたこと、このチームでハンドボールができたことを誇りに思っています。今回優勝できたのは、楠本先生のご指導の他、保護者の皆様に支えていただいたことや、応援して下さった方々のお陰だと思っています。本当にありがとうございました。

戦　評

男　子

■準決勝（11月26日・小瀬スポーツ公園体育館）

早稲田大学　35（18－14、17－13）27　大阪体育大学

大体大スローオフでスタートしたが、早稲田が中央のリバウンドを玉城が決めて先制。その後、大体大が小安・田中で連取。常に1～2点差でリードして、早稲田が追う展開となった。24分過ぎまで一進一退であったが、桐生兄のポストシュートが決まり、早稲田がペースを掴み、5分間、岩下の好守で無得点に押えている間、東江、山田･桐生弟､森田で6連取し逆転。前半を4点差として後半に入る。

後半開始早々、早稲田は、内海からの絶妙なパスが山田にわたり、中央からの得点を皮切りに、山田・桐生弟で3連取。大体大も柴山・稲毛・酒井の3得点で食い下がるが、早稲田が常に5点差をキープして推移。14分過ぎから大体大の攻撃にミスが目立ち、そこを早稲田が突き、19分42秒の山田のミドルシュートで10点差、25分稲垣のポストシュートで11点差となり、残り2分で大体大が3連取して意地を見せたがタイムアップ。

中京大学　29（19－11、10－17）28　日本体育大学

開始38秒、中京大小塩が先取点。その後、日体大は元木のミドルですぐ取り返し、更に石橋・小山で3連取しリードしたが、17分までは1点を取り合う展開で推移。その後､日体大にミスが目立ち、そこを中京大が突いて、中野の好リードから小塩・平子他で3連取、此処で、日体大がチームタイムアウトを取り、OF・DFのバランス修正を図るが、立て直し出来ず、中京大が更に3連取で連続6得点を加点して優位に立ち、前半を8点差で折り返す。

後半に入るとエース元木がペースを取り戻し、DFのバランスも良くなり､中京大を7分から16分までの9分間を1点に押える間に、元木･小山、福田等が加点して、じわじわと追い上げ、21分21秒、千葉のシュートで1点差に追い詰め、28分35秒福田のシュートで同点。残り53秒、日体大がタイムアウトの後、藤江のパスから元木がノーマークとなったが外し、その折り返しに中京大がタイムアウト、OFを確認して、宮元が右45度から切り込み得点。残り4秒、再開と同時に、日体大小山のハーフライン手前付近からのダイレクトシュートが右満月に入ったかと思われたが、無情にもゴール手前で終了のブザーでノーゴール、中京大が勝ち上がった。

■決勝（11月27日・小瀬スポーツ公園体育館）

早稲田大学　27（12－13、15－13）26　中京大学

開始早々、東江のミドルで早稲田が先制、中京大も平子で返しての立ち上がりの攻防であったが、4分8秒から森田のミドル、稲垣のポスト、山田のミドルで早稲田が3連取。ここで中京大がタイムアウト、再開後、平子が決めて2点差にしたが、その後は、互いに点を取り合い2点差、3点差で推移。早稲田は27分11秒に山田で得点後、終了後まで、無得点に押えられ、3連取されて逆に中京大1点のリードで前半を終了。

後半立ち上がり小塩の2連取で15対12とリードした中京大を早稲田が追う展開となったが、8分過ぎから、早稲田が徐々にペースを掴み始め、森田･東江･森田のミドル3連取で18対17と逆転、中京大も直ぐに平子で返し18対18。その後、早稲田岩下の好キーピングと、中京大ゲームメーカー中野を厚めにマークしたDFで5分間を無得点に押えている間に、東江のミドル、川島のサイド、森田のミドル、桐生弟の速攻で17分には5点差とした。このまま推移とみられたが、中京大も田村の好守もあって、21分から6分間早稲田を無得点に押え、27分に1点差に追い上げた。

その後、プレスDFで早稲田に迫ったが、28分49秒桐生弟の速攻で得点した早稲田が2点差として、29分44秒中野のシュートで迫られたものの、29分54秒タイムアウトで最終確認した早稲田が、25年振り4回目の優勝を手中にした。

決勝戦にふさわしい熱戦であったが、此処で決められたら流れが変わると言う大事な7mTの好捕、速攻のパスをカットして再三ピンチを救った早稲田GK岩下やサイドシュートを封じた中京大田村の好守が決勝戦を引き立てた。

女　子

■準決勝（11月26日・小瀬スポーツ公園体育館）

大阪体育大学　29（13－12、16－6）18　東海大学

東海大のスローオフ直後、川村のミドルで先制したが、大体大も、すぐに角南唯、長尾、大山などでコンスタントに加点、東海大も諸岡、川村、酒巻で迫るが、1点差を超える事が出来ず、大体大が13対12で後半へ。

後半に入り、東海大は坂巻で直ぐに同点としたが、その後は、GKの好捕もあり、東海大の攻撃を封じて、早いパスワークでコート一杯を使った攻撃で、角南唯、大山、河嶋でコンスタントに加点。13分54秒、佐々木へのスカイが決まるなど攻撃に余裕の出てきた大体大が、その後も、佐々木、長尾、角南果保、角南涼、国方で加点し、東海大を散発6点に押えて大勝して決勝戦進出。

東京女子体育大学　27（13－7、14－11）18　中京大学

立ち上がりは、お互い探り合いの様な展開となったが、2分過ぎ、中京大近藤のカットインを東女体のファールで得た7mTを新井が決めて先制。5分川下で2点差としたが、東女体大も6分45秒に石井が決め、更に8分田中が決めて同点と言うロースコアで推移。15分過ぎから、門谷、一木、田中の3連取で8対5とした東女体が、その後もペースを握り、25分41秒田中の速攻で12対6とした。終了間際に互いに点を取り合って13対7で前半終了。

後半に入っても、東女体は笠木のゲームメイクから着実に得点を重ね、GK白石の好守とDFの頑張りもあり、攻め切れない中京大から､15分39秒から17分12秒近藤の退場を含み20分まで4連取。その後は、点の取り合いとなったが、結局、9点差で勝った東女体が決勝へ進出。

■決勝（11月27日・小瀬スポーツ公園体育館）

大阪体育大学　20（8－6、12－9）15　東京女子体育大学

男子同様、東西第一シードの対戦となった決勝戦は、開始43秒で得た7mスローを長尾で決めた大体大がペースを握り、その後、1分49秒佐々木の得点から、6分36秒角南唯の得点まで共に動かず、3対0となった所で東女体がタイムアウト。しかし、流れは変わらず大体大が佐々木のロング・大山のミドルで6対0として優位にたつ。14分過ぎから東女体の守りが機能し始めると共に大体大の拙攻もあって10分間無得点の間に、笠木・角屋で3連取し6対3としたが、大体大も佐々木・長尾で加点。前半残り5分、東女体が門谷・石井・笠木で2点差まで追い上げげたが、前半終了。

後半に入り、56秒、ポストから角南果、東女体のパスミスから大山の速攻と2連取して5点差とした大体大が優位に立つ。その後、東女体も、すぐ、一木の2連取で何とか2点差をキープ。そのまま、1～2点差を追う展開で経過した。19分38秒、東女体・笠木の得点で14対13と追い上げげたが､勝ち越せず､20分過ぎから大体大が、5連続得点で、東女体を振り切り、残り4秒で東女体の15点目が入って、そのままタイムアップとなり、大体大が2年振り2回目の優勝を遂げた。

全日本学生ハンドボール選手権大会初出場校の紹介

桐蔭横浜大学（男子）

桐蔭横浜大学ハンドボール部主将　佐藤 竜登

●部発足の歴史

桐蔭横浜大学男子ハンドボール部は、2008年4月、桐蔭横浜大学にスポーツ健康政策学部が開設されたのを機に男子7名でスタートしました。7名の内3名は、大学からハンドボールにチャレンジする未経験者で、初参戦となった秋季リーグは岡本監督がユニクロで揃えたTシャツがユニフォームというところからのスタートでした。しかも記念すべきリーグ初戦は敗北となり、関東7部でも勝利できないチームでした。しかしながらチームのモットーである「No Rain, No Rainbow. 虹が見たければ、雨を我慢しなくては」の精神を糧に、目標を達成したければ、辛さや苦しさに負けず、日々努力を継続していくことの大切さを学び実行し、その後の競技成績は関東7部から3部まで全勝し、2部まで5期連続昇格を果たしました。創部5年目の2012年秋には初挑戦となった1部との入替戦に勝利。創部当初からの夢であった1部昇格を達成しました。トップゾーンとは技術差はあったと思いますが、学生それぞれが「自分なりの限界にチャレンジしようという姿勢」が本当に大切なことだと信じて進み、その道が間違いではなかったことが証明されて、1部昇格は本当に嬉しいことでした。

●大会初出場への抱負

創部6年目で初めての出場となる今回の全日本インカレに向けて、チームは変わらず努力を継続しています。インカレに出場するチームと比較すると、身長も技術力も低いので、日々の努力で培った体力と、岡本監督から学んだ戦術力を武器に試合に臨みたいと思います。また、桐蔭の最大の長所はチーム全員で攻撃・守備を実行する組織力で、心から信頼できる仲間とのチームワーク力を発揮したいと思っています。試合展開は簡単にはいかないことが予想されますが、そんな時こそ桐蔭らしさ「真摯さ（真面目でひたむきな態度）」を決して忘れずにインカレという最高の舞台を充実した瞬間にしたいと思います。学生としてインカレの舞台に立てる喜びと、創部当初よりご指導いただきました国士舘大学や国際武道大学、また応援していただきました方々への感謝の気持ちを胸に精一杯プレーしたいと思います。

駿河台大学（男子）

駿河台大学ハンドボール部 監督　鈴木　徹

●部発足の歴史

今から10年くらい前までは、ハンドボールが盛んな埼玉や東京エリア、駿台甲府高校のOBなどのメンバーが集まり、同好会として「関東学生リーグ」に参戦をしておりました。しかしながら、その後、スタッフもいないことから部員は減り、いつの間にか廃部をしていました。

もともと埼玉県の飯能という場所にある本学は、敷地の広さはもちろんのこと、スポーツ施設も充実しておりました。そこで、その施設をもっと有効活用し活気のある大学にすべく、保健体育科の免許取得ができる「現代文化学部」を2009年に、2010年にはスポーツ寮も新たに建設をすることで、本学としましては、『スポーツへの強化』を一気に押し進めていきました。

2009年の3月頃、恩師である八田政久先生（駿台甲府ハンドボール部顧問）や当時、駿台甲府高校の校長であった山口博伸氏（現駿河台大学特任理事）より「駿河台大学ハンドボール部の監督」の打診を頂きました。私自身、陸上選手としての活動がありましたし、ハンドボールのチームへの指導は未経験でしたので、数日、考える時間を頂きました。

1999年に自らが運転する車で事故を起こし、ハンドボール選手の夢が断たれたこともそうですが、事故を起こしたことで沢山の方々にご迷惑をかけてしまいましたので、その方達への恩返しをと思い、お受けすることにしました。

2010年の4月からハンドボール部としての活動が始まり、部員11名からスタートすることになりました。母校の駿台甲府高校はもちろんのこと、地元埼玉の浦和学院高校の岩本明先生をはじめ、明星高校の小川先生、東海大学菅生高校の山田先生など、多くの先生方のご協力のおかげで、初年度より素晴らしいメンバーが集まりました。

自身、監督業と選手との二足のわらじとなりましたが、高校

の後輩である内藤大輔くんがコーチとして一緒に指導をしてくれることになりましたので、11名の部員を減らさないことを1番に考えながら活動をしていきました。少人数ということでゲーム形式の練習ができず、反復練習が多くなってしまうことで練習へのモチベーションが下がる時期もありましたので、その時はハンドボール以外のスポーツも行いました。サッカーやバドミントン、ユニバーサルホッケーやバレー、学園祭の日に陸上記録会をしたことは今でも良い思い出となっています。

●インカレへの道筋

当初、1期生（現4年生）と掲げた目標は「1部昇格とインカレ出場」でした。部員も年々、10人くらいのペースで増えていくと同時に、戦力としても上がっていきました。それと同時に自身、陸上の試合や合宿等で練習に行けない日が増え始めたので、途中から部の体勢を変え、現場の指導は内藤コーチに、それ以外の選手の勧誘や事務作業などを私がすることでチーム強化のみならず、運営も円滑になりました。

関東学生リーグは7部からスタートし、おかげさまで3部まで全勝で勝ち上がっていくことができました。2部昇格をかけて臨んだ昨年は、春リーグの入れ替え戦で慶應大学に接戦の末に敗退し、全勝記録も止まってしまいました。その後は、チーム一丸となり、秋リーグも順調に勝ち進み、迎えた大東文化大学との入れ替え戦は、大差で勝つことができ2部昇格となりました。今年から2部リーグに参戦し、春秋ともに2位で入れ替え戦に進みましたが、春は桐蔭横浜大学に21対24、秋も法政大学に25対26と敗北を喫し、念願であった「1部昇格」へ目標を達成することができませんでした。

しかし、春リーグ後、1期生の中には悔しい思いはありながらも「インカレ出場」への思いは消えておらず、チームの結束力はさらに強くなっていきました。1期生の中には就職活動でなかなか部活に出て来られない選手もいましたが、最後は「インカレで終わりたい」。そんな思いをもちながら、みんな今やるべきことを一生懸命に頑張っていました。

迎えた東日本学生ハンドボール選手権大会は、就活組は調整が遅れ、後輩の力を借りながら戦うことになりましたが、金沢大学、道都大学、秋田大学と危なげなく勝利し、見事、「インカレ出場」の目標を達成することができました。

●初出場の抱負

1期生にとっては、インカレは最後の大会。また、監督、コーチの地元である山梨で行われるインカレは特別な思いがあります。大学のスタッフとしては、「1秒でも長く、1期生のプレーが見たい」という思いと、大会スタッフとしては、「1秒でも多くプレーをしてもらい、良い思い出を作って欲しい」という2つの思いがあります。

初出場になる今大会は、1試合でも多く試合ができるようチームみんなで頑張っていきたいと思っています。

小樽商科大学（女子）

小樽商科大学ハンドボール部主将　佐々木 葉子

私たち小樽商科大学女子ハンドボール部は、創部7年目というまだ出来て間もないチームです。男子はそれ以前から活動していたのですが、女子は高校の経験者が入学した際に作られました。当時は2部から始まり、試合に出ることもやっとという少人数で戦っていました。それが徐々に人数も増え、試合でも勝てるようになり、3年前に1部に昇格し、私が入部した2年前の春は1部6チーム中5位の成績でした。そして私の代で経験者が多く入り、チーム全体のレベルが上がったことで、23年度春5位、秋4位、24年度春4位、秋3位と、一つず

つ順位も上がっていきました。

24年度秋季大会が終わり新チームになると、それまで中々納得のいく練習が出来なかった未経験者たちを中心に、まずは基礎からやり直し、一からチーム作りを始めました。そして少しずつ自分たちのチームカラーを見つけてはゲームで確認し合い、方向性を見失わずに練習してきました。このままの勢いでチーム作りは順調にいくと全員が思っていましたが、冬に主将の私が大怪我をしてしまい、一気にチームが機能しなくなりました。絶望感が漂い、モチベーションもばらばらになっていき、練習が成り立たないこともありました。しかし新年度を前にして、このままの状況はよくないと思ったので、まずは行動し、もう一度チーム統一をしようと全員で意見を言い合いました。また他校と合同で練習し、大会に出場するなど、少ない人数ながらもレベルアップのために出来る事は片端からやりました。それから春になり、経験者の新入生が入部してくれたおかげで、再びチームが活気づきました。その結果、私は出場することができませんでしたが、優勝という目標で臨んだ春季大会は、1敗同士の得失点差で初の準優勝を果たしました。目標は達成できませんでしたが、どれも内容の良い試合ばかりで、もっともっと強くなれるという自信がつきました。

そして初めて出場した東日本インカレでは、ただただ全国とのレベルの違いを痛感させられました。失点ばかりで得点出来ず、全く修正も対策も出来ないまま終わってしまいました。課題ばかりが目立った大会でしたが、収穫もたくさんありました。私たちは課題にばかり目をやらず、盗んだ技術、感じたスピード、あたりの強さ、声の出し方などを北海道で勝つための材料にし、他校への対策に組み込んでいきました。そしてなにより、もう一度同じ舞台で自分たちの納得のいく試合をしたいという想いから、北海道での優勝の先にある、全国大会を見据えた練習を重ねました。今思えば、2位で出たこの東日本での経験が私たちを強くし、チームのターニングポイントとして今にとても生かされています。

こうした結果、秋季大会では春に唯一負けた相手に競り勝ち、最終戦でそれまで9年連続で優勝していた北星大学を破り、全勝で初優勝を果たすことが出来ました。苦しい試合が多かったのですが、この大会期間中は、春で1敗して準優勝だった悔しさと東日本インカレで圧倒的な力の差を感じたことが全員のメンタルを支え、常に頭の中にあった「全国レベルだったら…」という考えが全員のプレーを支えていました。そして得た全日本インカレの出場権利。今回私たちは初出場ですが、恐れることなく全力で挑戦していこうと思っています。いつも大切にしている会話と、先手のDF、スペースを使ったOFを軸に、約束事を徹底して少しでも多く自分たちの時間がつくれるように、チーム全員で戦います。東日本ではまったく通用しなかった自分たちのプレーがどれだけ成長して、どれだけ発揮できるかを試していくのも楽しみです。そして必ず多くのことを吸収して、北海道に持ち帰ります。今大会で引退する選手も多いですが、後輩に伝える、北海道の他のチームに影響を与えるという作業も、北海道代表として出場する私たちの使命だと思っています。初出場から連続出場へ、今大会が東日本に続きチームにとって2度目のターニングポイントになるように、出場だけに満足せず、果敢にチャレンジしていきます。そしてこれまで支えていただいた保護者の方や先輩方、練習に協力してくれた方々への感謝の気持ちを忘れず、価値ある大会にしたいと思います。最高の舞台で、最高の仲間と、最高のハンドボールをする。会場の雰囲気から試合観戦、そして本番、すべてを全力で楽しみます。

PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP

女子決勝戦から

男子決勝戦から

PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP PHOTO SNAP

訪問レポート JHAジュニアアカデミー

「ハンドボール選手としての個人技能・能力のレベルアップを図り、世界に通じる選手としてのスキル教育を行うと共に、将来に渡り日本を代表し社会で活躍出来る人材としての育成を行う。更には、人間形成の支援と競技力向上の両立を図る。また、選手としての強さを身につけるために、体力トレーニングを重点項目として、体格を形成することを行う。」を基本方針として、2008年10月24日ジュニアアカデミーが開講した。発足から5年が経過した2013年11月上旬、味の素ナショナルトレーニングセンター（以下：ANTC）にてジュニアアカデミー指導中のJOC専任コーチングディレクターでもある田中茂氏を訪ね、ジュニアアカデミーの発足経緯や現状について伺った。

アカデミー発足の経緯について

2000年に開始した「ナショナルトレーニングシステム（NTS：一貫指導システム）」では、発掘から育成する仕組みとして、ブロックトレーニング及びセンタートレーニングを経て、其々のカテゴリーでの育成選手を選考している。しかしながら、ブロックトレーニングでは1泊2日での合宿、センタートレーニングでも2泊3日程度の合宿での指導となっており、指導時間の不足は否めない状況にあった。最終目標は頂点の強化にあるが代表選手だけを強くすることは難しく、U-15など若い世代から定期的にトレーニング・育成する必要性が言われてきた。その結果、将来に渡り日本を代表し社会で活躍出来る人材として育成を行うために、2008年にジュニアアカデミーを開講する運びとなった。

アカデミーの役割について

ジュニアアカデミーでは、NTSで言う発掘と育成の観点から見れば、育成に重きを置いている。また、先に触れたように、頂点強化にはU-15世代からの育成と強化が必要であり、そのためには、所謂、大きな選手を育てていきたいと考えている。ジュニアアカデミー招集の基準は、アンダー各カテゴリーは現時点での最強選手を選んでおり、例えば背が低くとも能力のある選手などが居る。しかし、ジュニアアカデミー選考では、大きな選手の育成を主眼に考えている。現状、大きな選手はややもすると、チームでは充分に使われていない選手もいるのが実情であるが、これは一つには大きな選手ができるポジション(バックプレイヤー、ポスト）のプレイヤーに育てるのには、多彩な動き、パス、シュートなどに時間が掛かることもあり、故に試合に出場できない選手もいる。このような選手を始め大きな選手を招集し育成することで、上位のカテゴリーで活躍できるように育てていきたいと考えている。今の日本代表選手にも信太、成田、笠原、加藤、久保らジュニアアカデミーから育った選手が選ばれている。

大きくて動ける選手を育成していきたいことから、4泊5日程度の合宿を年間10回程度の計画を立てており、今年度も残りが少ないが、12月、2月、3月と合宿を予定している。合宿のプログラム例としては、朝、6時30分ランニング、10時～12時基礎体力のサーキット・フットワーク・トレニング、午後はボールトレーニング、ディフェンストレーニング、夜には、女子ウエイト・男子プール（日によって交互に行う）と4部での練習と多岐に亘っている。又、その他のプログラムとして、夕食後のJOCチームビルディングプログラム、座学によるチームワークの訓練、英語での講義受講、選手同志の会話・コミュニケーション育成なども加わり、多面的なカリキュラムを実践している。更に、彼ら自身の今後の着地点・方向性・目標を考えて欲しいことから、個人面談にも重きを置き、参加者全員に実施している。基本的な指導は、私を含めたスタッフ3名（大城さん、市来さん）で行っているが、例えば、GKの指導では元日本代表のGKに協力を戴くなど、夫々のポジションに沿った専門の指導者を呼んで指導をお願いしている。

選手招集の状況

中学・高校・大学に所属の選手であり、合宿への召集には夫々に事情も出てくるが、大半の選手は参加が出来ている。中学生の招集では、義務教育期間であるこ

とから、本人・保護者・学校からの要望や制限もあるが、保護者に引率のお願いをしたり、地方からの参加選手にはスタッフが出迎えや送迎を実施するなどの特別な配慮もしている。高校生は、インターハイや国民体育大会以降は新チームがスタートすることから、3年生が充分に練習ができない状況にあり、次のステップへと飛躍するためには停滞が許されない大事な時期であるにも関わらず、練習が充分にできないことは望ましくない。合宿に参加することで少しでもカバーが出来ればとも考えている。大学生は、授業の関係や、大会前後のチーム事情などがある。当然のことながら学業優先であり、大学の各種大会も目白押しであることを考え合わせると、止むを得ない環境にあることも理解している。

アカデミーの今後について

召集への制限も多々あるが、ジュニアアカデミーが大きな選手を望んでいることも浸透してきており、この考えは認知されてきている。バスケット女子日本代表の渡嘉敷選手（193㎝）をみても、大型選手の活躍はマスコミ受けばかりでなく、チーム力が確実に上がっていることを結果として残している。

2019年の女子世界選手権、翌年2020年の東京オリンピックと成果を出さなければならない目標が決まった。今後の、ジュニアアカデミー自体がどの様に進んでいくかは、協会全体の中で議論をしていかなければならないと考えている。他の競技団体を見れば、2020年を目指して、レスリング・フェンシング・卓球他の個人を基本とする競技団体は、JOCアカデミーの構想でもあるが、選手がANTCから近隣の学校に通いANTCで練習を重ねている実態にある。これを、ハンドボールに適用するには難しい面もあると思うが、練習場所や宿泊環境も充分なANTCを最大限に活用することは言うまでもないことである。

ジュニアアカデミーの受講生は、最低でも一年間は観察・指導していきたいと考えている。元々、体格が良い選手を選んでおり、これからの競技生活を進める上でのポテンシャルは有る訳で、自身のやる気が発揮され、加えて体力面・精神面での成長があれば、将来の日本代表候補の人材となることは間違いなく、大いに期待をしている。

参加選手へのインタビュー

今回ジュニアアカデミー選手に選ばれての感想などを伺いました。

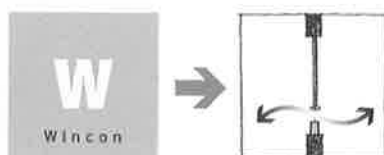
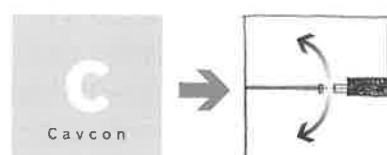
徳田和紗（氷見高校1年）［写真左］

身長：175㎝

ジュニアアカデミーに選ばれたことを聞いた時は、自分がこんなに大きなところへ来て良いのかなと思いましたが、先生からは「頑張って来い」と言われ嬉しかったです。アカデミーの合宿に参加して、色々なことを学びましたが、特にバランスの取れた食事とか普段の小さなことが、ハンドボールにつながるのだなあと感じました。日々学校で行っている練習内容とは違いますが、合宿が終わり自分の学校へ戻ると少し上手くなった気持ちになりますし、部員のみんなにも、毎日の食事の大切さやバランスの取れた食事を心掛けるようにアドバイスをしています。2020年のオリンピックへは、これから一杯練習して代表選手に選ばれるようにしていきたいです。

中野智佳（小松市立高校2年）［写真右］

身長：172㎝

顧問の先生からお聞きしびっくりしました。私なんかで良いのかなとも思いましたが、先生から、「頑張ってうまくなって来い」と言われ勇気が湧きました。合宿も5回目となりますが、肉体的には辛いけど頑張らなければと思います。合宿では、フィットネスなどの指導で体力向上のための基礎知識も学べ、自分にとっても身になることが多くあります。上手い人がたくさん居てとても刺激になり、一緒に練習させてもらうことで、より一層上手くなりたいと感じています。2020年の東京オリンピックでは24歳となっており、その時には日本代表になってオリンピックに出場したいと思います。これからは、筋力と体格のレベルアップを更に図りたいと考えています。

ヨーロッパのハンドボールLIFE

スウェーデンのハンドボール事情

GW Landskrona（スウェーデン）
宮城知枝

私は日本で小学校教員を勤めていた時から、何時か海外に出て生活をしたいという夢を持つようになりました。そして、趣味である海外旅行で北欧スウェーデンを初めて訪れた際に、沢山の方々との出会いに恵まれました。そのお陰で、このスウェーデンでも教師という職に様々な形で携わる事ができました。ハンドボールをプレーする事が目的でスウェーデンへ来た訳ではありません。しかし、言葉も出来ない、友達もいない、この環境で唯一私が思いっきり自己表現できる事は、この国の人々と社会で繋がれ、国際交流が楽しめる事だと感じました。そして、大好きなハンドボールを続けるためチームに所属する事だと思い、地元のクラブチームに通い始めました。

スウェーデンでは、2010年男子世界選手権をきっかけに、Stefan Lövgren氏を中心にハンドボールを活性化させる動きが出ている事は確かです。スウェーデン国内リーグが頻繁にテレビ放送されるようになり、プレーオフも大々的に開催されています。これまでは、スウェーデンの有能選手は近隣国のプロリーグへ移籍してしまい、スウェーデン国内においては盛り上がりが欠陥していました。しかし、近年はスウェーデン選手や諸外国のナショナル選手をチームに所属できる体制をとり、国内リーグでの技術・戦術向上と試合内容にも面白みが増してきています。これからのスウェーデンハンドボールリーグの発展を楽しみにしたいところです。

国内のリーグについては、ELIT、Allsvenska、1部南北、2部東西南北、3部東西南北、4部…という構成になっています。頻繁にリーグ編成が行われているので、例えば1部以下のチームは入れ替え戦を行っても行わなくても、来期は1部か2部のどちらに属するか分からない事もあります。

これまでの私の在籍クラブは下記になります。

- 2006-2007 GW Landskrona—3部
- 2007-2009 Fotuna Rydebeck—2部、2部
- 2009-2013 OV Helsingborg—2部、3部、2部、1部
- 2013-2014（現在）GWLandskrona—2部

初年度は初めての海外生活でしたので、通いやすい地元のGW Landskronaに所属し、ハンドボールができる事を楽しみました。翌年にもう少しレベルの高いチームでプレーしたい意欲も高まり、Fotuna Rydebeckの監督から誘いを受け、そこで2年間所属しました。小さな村のクラブだった為、次第に選手がいなくなり、チームが消滅していまいました。高校生の若手から主婦のベテラン、中には現役ジュニアのナショナル選手や、元ナショナル選手や元エリートリーグ選手等も在籍していました。面白い選手層と温かみのあるチームで、個人的には好きだったのでとても残念でした。その時に、親しかったチームメイト達がOV Helsingborgへと移籍し、誘ってもらったのをきっかけにハンドボールを続ける事にしました。そして、今期は地元チームの監督から誘いを頂き、GW Landskronaに復帰してプレーしています。たとえ趣味だとは言え、こうして今もハンドボールが続けられている事。どのチームでも主力選手として試合に出場させてもらっている事。いつでも皆が温かく迎え入れてくれる事。スウェーデンでのハンドボール環境に、感謝の言葉がつきません。

これまで3つのハンドボールクラブに所属してきましたが、選手層が幅広く、若手からベテランまでが混合したチームで、ハンドボールの経験年数、ハンドボールに対する熱意、選手の生活環境等、日本とは違った面白さと経験が得られます。正に生涯スポーツとしてハンドボールができる環境はとても魅力的でもあります。

私達のようなアマチュア選手は、最初の契約時に実費で選手登録費用とスポーツ保険金を支払います。クラブによって待遇は異なりますが、たいていはトレーニング衣類等を配布してくれます。練習は一週間に3回程、夜間に体育館で1時

間30分程行います。その前後にインターバルトレーニングや筋力トレーニングを行うクラブもあります。試合会場までは、遠距離であれば大型バスを利用し、あとは監督や役員、選手や父兄の車送迎です。リーグシーズンは９月末から３月末までで、一週間に１回試合があるのが平均的です。主に週末ですが、平日であれば夜間に試合を行います。

夏のビックイベントはビーチハンドボール大会です。これは子供から大人まで多数のチームと選手が集まり、いつもとは違った形でハンドボールを存分に楽しむ事ができます。

スウェーデンで感じたハンドボールに関する良さは沢山ありますが、中でも小学生から練習を始める事ができ、身近に携われる環境がある事です。こちらでは完全に室内競技の為、一年中プレーする事ができます。例えば、小学生は週２回ハンドボールをやり、他の曜日には他のスポーツをやって、様々な競技を経験しています。小学校体育の授業でも取り入れられています。また、地元にクラブチームがあるので、気軽に試合観戦でき、テレビでもヨーロッパ選手権や世界選手権等、ハイレベルの試合放送を見る事ができます。

特に私が感銘を受けたのは、シーズンオフはとにかく自分たちの余暇を自由に楽しむという事です。シーズンが終われば長期休暇に入るので、その間に海外でアルバイトをする選手、海外や国内旅行へ行く選手、サマーハウスで家族や友達と過ごす選手、乗馬や水泳等他競技を行う選手等、各々がハンドボール以外にも趣味を持っていて、余暇の時間を有意義に楽しんでいます。こうして様々な経験を増やし、自分の可能性を高められる事は、将来的にもプラスになる良い機会だと思います。

こちらで試合に参戦し、非常に印象的な事は、皆が試合に対する闘争心が強い、という事です。試合前のアップでも試合中でも、自発的に声をかけ合い、良いプレーや、ゴールが決まればガッツポーズと、喜びや闘志を全身で表現する姿勢が好きです。自分達で声を張り上げて試合を盛り上げていく。コートに立つ選手も、ベンチで一緒に戦う選手も、観客席から声援を送る人々も。皆が一つの試合に集中し、勝利への熱意があらわになるのは、一緒にプレーをしていて非常に面白いです。私がこれまで所属したチームでは、試合が終ると控え室で勝利の唄を歌いあうのも習慣です。たとえアマチュアであれども、一つの試合に集中し、選手一人一人の内面の強さも感じられるのも醍醐味です。

私生活についてですが、最初はスウェーデン語習得の為、移民の為の語学学校に通いました。その後、成人の為の学校に通い、スウェーデン語を高校卒業レベルまで学びました。そしてこの夏まで、スウェーデンでの教員免許取得の為に、一年間マルメ大学でスウェーデンの教育学を学び、同時に幼稚園で約８ヶ月間の教育実習を行っていました。それらも無事に修了し、スウェーデンでの幼稚園教諭、小学校教諭、保

健体育教諭の免許を取得する事ができました。

現在、平日は、実習先だった現地幼稚園で代講講師の仕事に就かせてもらっています。そして、週に一度の夜間、武道クラブで日本語講師、毎週土曜日にはコペンハーゲン日本人補習学校で常勤講師を行っています。私はスウェーデン南部スコーネ地方に在住していますので、隣国デンマークにとても近い地理です。通勤には片道２時間程かかりますが全く苦ではなく、むしろ楽しみです。国境であるオレスンド橋を鉄道で越えたり、ヘルシンボリからヘルシンオアまでフェリーで渡れたり、まるでデンマークへ小旅行しているようです。平日はスウェーデン語漬けになりますが、一週間に一度でも補習学校へ勤務する事で完全に日本語環境になるので、まるで日本へタイムスリップしたかのように、日本社会や日本の良さを改めて感じられます。何よりも私の日本での教員経験を生かせる場がある事も喜びです。日本で教師をしていた時から子供が大好きで、子供達の成長の手助けをし、それを見守れる職に興味がありました。スウェーデンに来ても、現地の幼稚園で１歳から５歳児までの教育現場に携われ、コペンハーゲン補習学校では日本の小学校教育に携われて幸いです。スケジュールとしては、一週間休みが無くなってしまう事もあります。ハンドボールだけに集中できるわけでもありません。土曜日の試合は欠場しなければならない時もあります。しかし、私にとっては、仕事もスポーツも趣味も無理無く両立できる生活環境に満足しています。視野や見聞が広がり、貴重な経験を積めている事は確かです。

これからも、日本のハンドボールが好きな人々が一人でも多く、世界のハンドボールに触れられる機会が広がっていく事を願っています。

～「おりひめ」若い力の台頭を～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー

明けましておめでとうございます。今年もハンドボール界がさらに発展し、スポーツ界からさらに注視されることを楽しみにしている。

昨年は日本スポーツ界、ハンドボール界にうれしい出来事が多くあった。最高に盛り上がったのは流行語大賞にもなった“お・も・て・な・し”の2020年東京オリンピック、パラリンピックの開催が決まったことだろう。

そしてハンドボール関係者にとっての最大の喜びは東京オリンピック前年、2019年に開かれる女子世界選手権の日本招致決定だ。

世界選手権は熊本で男子が開かれて以来となり、今回も熊本を中心に開催されるようだ。成功を収めるためにも、しっかりとした準備で世界のトップアスリートを迎えたいものである。

そのためにも女子には一段と強化が求められ、まずは3年後に開かれるリオ・オリンピックには、何としても出場権を得たいものである。

昨年暮れのセルビアでの世界選手権。公募で決まった「おりひめジャパン」の愛称をつけて臨んだ女子日本代表。1次リーグは4位で16強で争う決勝トーナメントに進出、最終順位は14位につけた。

16強対決では、前回と前々回に準優勝、2003年大会では優勝しているフランスと対戦。残念ながら白星はならなかったものの、一時はリードを奪うなどフランスをあわてさせた戦いは、着実にレベルアップしていることを証明したのではないかと思う。

1次リーグ5試合、決勝トーナメント1試合の合わせて6試合を戦った。藤井（オムロン）がチーム最多の38点をたたき出し、石立（オムロン）が22点で続いた。そうした中、若手の田邉（北國銀行）が3位となる19点を挙げたのが注目だ。

リオ、東京オリンピックを視野に入れた強化プランで、欠かせないのは若い力の台頭である。中堅がベテランを脅かし、若手が中堅をあおり立てる。こう言った構図が描ければ、間違いなく「おりひめ」はレベルアップする。

宿敵・韓国を破ることがオリンピック出場への最大のキーワードである。そうした意味からも若い力の成長なくして道を切り開くのは容易ではないだろう。栗山一小藪体制での強化プランは、今回の世界選手権である程度の成果は上がっているとみていいだろう。

まずリオをめざし、東京へつなぐシナリオを改めてどう描くのか。今回の反省を踏まえながら課題解消へ早急に取り組むことが重要である。そのためにも若い力の急成長と台頭は大きなカギを握っている。一刻も早く「次へ」向けて強力なアクセルを踏み続けたいものである。

2013 NTSブロックトレーニング報告【東北】

東北ブロック運営委員長　高山 重雄

開催日時：平成25年8月10日（土）～11日（日）、
　　　　　平成25年9月7日（土）～8日（日）
会場：富士大学スポーツセンター
参加者：NTSスタッフ14名、インストラクター15名、
　　　　補助指導者27名、小学生26名、中学生38名、
　　　　高校生34名、計154名

東北ブロックでは、当初、東北6県持ち回りで行う予定でしたが、集まりやすい、会場が確保しやすい等の理由で、岩手県花巻市で開催しています。

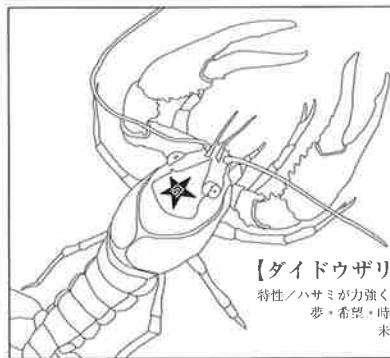
今回は、小中学生と高校生に分かれて実施をしました。各県に運営委員、指導委員、インストラクターを委嘱し、皆さんの協力によりスムーズな運営ができています。

インストラクターは小学生が山本先生（岩手）、中高生は佐藤先生（岩手）、荒井先生（宮城）、大沢先生（岩手）を中心として元全日本の冨本先生（福島県）、荒尾先生（青森県）、荻田先生（秋田県）等が熱心に指導してくださるので、選手たちも意欲的に取り組んでいます。

中学生も宿泊出来ることになり、宿舎での講義として、指導者の方々から選手たちに対するアドバイスを頂きました。メモを取りながら聞く選手もおり、指導者と選手、指導者同士の交流にもなり有意義でした。高校生には、内記先生（不来方高校・全日本ユースコーチ）から世界ユース大会のDVDを観ながら講義をして頂きました。全日本ユースの取り組みから世界との比較まで、幅広い内容でした。選手、指導者にとって大変勉強になりました。今後は、中高生が一堂に会した際の講義内容は検討を要します。

いつも苦労するのは、期日の設定と会場の確保です。8月、9月の上旬に東北中学校大会とJOC東北予選会、8月の下旬には東北総合体育大会（国体予選会）が開催されています。選手、指導者の負担にならないようにと考えているのですが、毎年、多少のご苦労をおかけしているのが現状です。また、会場確保で花巻市総合体育館を取れない場合は、富士大学にお願いするパターンで行っていますが、秋季リーグの直前にお借りするなど、大変ご迷惑をおかけしています。小友先生と樋下先生には、この誌面をお借りして、深く感謝を申し上げます。

ここ数年の特徴としまして、保護者の見学が多くなったことが挙げられます。開会の際にいつも言うことですが、まず、選手と保護者に数あるスポーツの中でハンドボールを選んでくれたことに感謝し、選手を支えてくださる保護者に感謝の意を述べています。そして、指導者には、選手、保護者の期待に応えるためには「勉強しない者は指導者ではない」と言っております。その勉強する場が、このブロックNTSと考えております。

まだまだ指導者の参加が多くはありませんが、東北から不来方高校に続く日本一のチームが誕生するよう、そして大同の武田選手に続く日本代表選手を輩出できるよう、指導者が連携を取りながら取り組んで行きたいと思います。

2013 NTSブロックトレーニング報告【関東】

関東ブロック運営委員長　菊田 政行

開催日時：2013 8/24（土）～25（日）、31（土）～9/1（日）
場所群：群馬県「富岡市民体育館」
「群馬県立吉井高等学校体育館」
参加者：NTS スタッフ 30 名
（総数）補助指導者 62 名、選手　小学生 47 名、中学生 55 名、高校生 48 名

今年度の関東ブロックトレーニングを群馬県協会の皆様のご理解ご協力の元、８月下旬、９月上旬の２週に渡り開催しました。14 回目を数え、運営・指導面ともにスムーズに展開され、また今年度より中学生のトレーニングも１泊２日で実施しました。

年を追う毎に選手・引率指導者の参加意識も高揚し、個人のスキルと全体のレベルもアップした感があります。実技指導においてもトレーニングの意図が明確で、ポイントが分かり易く説明実践されており、引率指導者からも大変好評でした。開催県のはからいで計画していただいた夜の懇親会では、インストラクター・補助指導者・地元スタッフ等を交えてのハンドボール談義に華が咲き、参加者にとって有意義な研修の時間を過ごすことが出来ました。

今後の課題としては、ブロックトレーニング期間中に指導者の為の講義やディスカッションの時間の確保をしていく必要性、さらには、中高生に実施している体力測定の結果についても複数年の記録の推移を公開し、各自にデータを還元させるべきであると考えます。その結果に基づいたトレーニング処方を個々の選手に示し、『世界基準の強い選手』へと育てて、活躍の場を拡げて頂くことを切に願っています。

また、NTS への参加選手の輩出チームが県によっては特定化される傾向にあり、NTS の方針なり運営方法が、一部の関係者のみに限られ、それ以外の者に十分に理解されていないのが現状です。各都県においては伝達講習会等を確実に実施していただき、NTS の情報が全チーム、関係者に速やかに浸透することを願います。例年、開催の時期等については施設の確保を最優先に、国体のブロック大会や各連盟の大会時期、更には学校行事等を考慮して計画実施してきたのが現状であります。今後を見据えた会場の確保や運営方法等についても検討を加え、改善して行きたいと考えます。

集合写真（小学生）

トレーニング光景（高校生）

トレーニング光景（小学生）

ヨーロッパカップ大会のビデオ観戦と感想寄稿

光島 磯雄（終身審判員）

平成 25 年 8 月 29 日～9 月 21 日
チャンネル 2 で見た「欧州カップ大会リーグ戦（準・決勝戦）」のビデオフイルム観戦感想記
出場チーム：キール、ハンブルグ、バルセロナ、ポーランド

この観戦記はビデオによるだけの印象にとどめるしかない。私個人の些細な国際経験は、協会から指名をうけて（当時の審判部長は岡前氏・大塚氏）二年ごとに IHF・PRC（IHF のルール・レフェリー委員会）が主導する「シンポジウムには 7 回出席受講」し（報告書は大塚氏を通じて協会に提出した）、一度は竹野氏と「大西洋マディラ島での IHF 総会に出席」した。1980 年代にソウルで開催された「世界女子ジュニア選手権大会」には、IHF から指名され、審判委員会付き委員として勤務したことあり。オリンピック大会には私的にミュンヘン、モントリオール大会を旅行視察。先頃のドイツでの世界男子選手権大会にも、私的に現在大阪協会会長の山中善之祐氏、いまは故人となった兵庫県会長の狩野幸介氏・長野県の故加藤雅之氏らと視察した。IHF ルール講習には 7 回派遣され、国際大会はインド・韓国等で吹笛した。

ごく最近では、先年熊本で開催された「男子世界選手権大会」時に、ホテルで突然客死した IHF 理事の「ジョニクンスト・ゲルマネスク氏の遺体還送の付き添い役」を仰せつかり、ルーマニア・ブカレストへ出張したことあり。古くは 57 年前、11 人制ではあるが、戦後初めて日本協会が「西ドイツナショナルチーム」を招待したとき、何の因果か知らぬが私ごとき者が日本チームの一人に選ばれて 1 試合出場したが、このときの強烈な見聞体験・印象・記憶が私の今日までの 60 年以上になるハンドボール人生のスタートとなった。おこがましいが、以上が私の個人史の概略である。

1 キエルツエ(ポーランド)対バルセロナ（スペイン）(8 月 29 日ビデオ観戦)

試合開始と同時に攻防とも罰適用をものともしない「やられたらやり返す露骨な対人違反行為」が続発する光景を見て「ああやっぱりの感」！　引き続いてレフェリーの対応ぶりは、これまでに見たオリンピックや世界選手権大会とはまるで違う雰囲気で、従来の IHF シンポジウムや地域的国際大会で何度も伝達されたオーソドックスハンドボールの印象はどこにも見られず、終始一貫して判定基準表示が曖昧で、信頼し難い放置の感あり。6m ～ 9m 域での攻防は両チームとも奔放に相手を掴む、押す、突く、転倒させる行為の反復である。伝統的に欧州では都市や居住地区単位のクラブが相互に競争意識が激しく、コーチや有望プレーヤーの引き抜き競争などで都市・州などのチーム強化態勢は、スポンサーやチーム専属の有志者等が組織的個人的を問わずあらゆる可能性を追求して、近隣の国や他州から引き抜き・招聘に努めるのだ。そしてコートでは、両チームの合計 14 人が 60 分間しのぎを削って、入れ代わり立ち代り交代して勝敗を争う、それを見て応援するために試合によっては何千～何万の老若幼男女のファンが熱狂と大音響で応援するのだ。このような欧州域独特の狂乱・熱狂とも表現できる興奮ぶりは試合プレーにも反映して、現今のアジア域とは全く異質な民族性による雰囲気と考えるべきか？

換言するならば、「6m ライン域と 9m ライン域」での激烈な攻守場面のプレーを吹笛するレフェリーは、欧州域独特または地球的な規模で「まったく異質なハンドボールを吹いている」と言えないか？　思い起せば、この半世紀のあいだに何度か「IHF 直轄のシンポジウム」や成年・ジュニア世界選手権や毎度のオリンピック大会関連の「IHF 直轄のゼミナールやシンポジウム」で毎度必ず強調され伝えられたレフェリング基準と較べるならば、明らかな相違・格差が「否定しにくい現実」になったと思うのだ。西暦 2000 年代まではノルウェーのカール・ワンク氏やスウェーデンのエリック・エリアス氏が IHF・PRC（ルール・レフェリー委員会）委員長の時代に伝達されたことと、今回のヨーロッパカップ大会の異和感はとてつもなく大きい。とくにヨーロッパカップ大会や欧州域の各国のトップリーグや国際試合などを担当するレフェリーは、前世紀末までのハンドボールと比較すれば、プレーヤーの意識・体格が積極果敢（あるいは勇猛果敢）過ぎて「近代ハンドボールのプレー」と調和しにくい格差はいまや明らかに決定的となっているではないか！「世紀末までの IHF レフェリングシンポジウム」では、歴代の IHF・規則・審判委員会（IHF ／ PRC）は必ず違反プレーや好ましからぬプレーの芽は早期に処置するようにと強調していたと記憶するが、今回のビデオによる「欧州杯」（E カップと略記する）を見る限り、レフェリーの吹笛対応は後手後手・中途半端になってるのではないか？

2 THW キール対ハンブルガー SV（両方ともドイツ）9 月 6 日観戦）

近年プレーヤーの「ボール支配コントロール能力が格段に向上し、とくに捕球時からシュートに至るまでの突進状態、シュートまたは他方向へのパスプレーやフェイントモーション（身体操作）の多様性は日進月歩の観がある。捕球と同時またはその後の 3 歩・3 秒以内に妨害をものともせず表現されるプレー行動と、着地する場面までの（着地後も）対抗防御の執拗な執着ぶり（違反行為による）は 10 年前とは大違いを感じる。いわんや、6m ライン沿いに並ぶ狭隘な防御の隙間をボール保持で突進し、ジャンプ後の着地までにシュート場面に移行中の攻防動作の「開始時から終末時の観察」にも従来と違う観察眼が求められ、有利地点へ入らせまい、または不利地点に留まらせる行動（攻撃側が相手を防御（妨害）する違反行為が 30 数年前 1 人の優秀なスタープレーヤー（ドイツ）を終身養護施設に収容してしまった「デッカルム事件」の反省は承知のうえで「押す・突く・捕まえる・動かせない・転倒させる・スタートタイミングをはずすなど（とくにジャンププレー中に）」の意図的行為に専念して行動しているがたまたま事故は起こらない！　これらの違反行為場面は早期に芽を摘んで排除し、常道に戻らなければ収拾不能または重大事故発生につながりはしないかと危ぶむ！　そこで世紀末にも重々強調された「アドバンテージプレーをいかに有効に適用するか」の見直しに重点を戻すべき！ではないか。表現を変えれば、ことの起こりはアドバンテージ観察の個人差や地域差（アジヤ・ヨーロッパ・ラテン）が独り歩きして「やられたらやり返す・眼には眼を」「歯には歯を」心理への対応がおくれて、「試合の止めどない過激化・粗暴化が放任された」ことによると言えないか⁉　子供にはとうていやらせたくないスポーツになっているが、欧米ラテンは意識が違うのか！

3 ハンブルガー SV 対バルセロナ（9 月 21 日観戦）を見て

昔からハンドボール観覧の本来の関心興

味は「タフ（果敢な・不屈の）プレー」を見ることにあり、「ラフ（粗野・粗暴な）プレー」を見ることが真の本旨ではない。しかし「タフプレー」が試合開始直後から「ラフプレー」に変容して、ハンドボールの本領であるかに誤解させる、または観客・メディアの興味関心が「靴の左右履き違え」になったことに気付くべきではないか！　極言するならば、観客の興味関心がラフプレーに偏って、メディア自体が「悪乗りした観あるレフェリング」も問われるべき問題ありと言えないか？　さらに加えるが、このビデオの解説者は「これこそ真のハンドボールです」と「ラフ」一本槍の攻防プレーを礼賛するかの口調でいたのだ。「果敢なプレーの追求」といえば聞こえは良いが、実態は激突で転倒する、ユニホームは破られる、血染めになる、チーム役員が無断でコートに立ち入る・出血の手当が不十分で出場する、笛が鳴っても聞こえないふりをするなどなどヨーロッパカップ大会のレフェリー氏らの挙措・動作について日本協会の審判部門の見解はいかがなものか？（実際に国内でビデオを見た人の多寡は不明）（明らかに幼年者には勧められず！）今後は国際試合開催も予定されるであろうし！　解説担当者は「ラフ一本槍」の「欧州カップ」を礼賛するかの口調で、しかもレフェリング実態やルール条項適用の実態と相互関係には言及していなかったのだ。併せて現在の日本協会審判委員会の何人がこのビデオの存在に気付いたのか、これに関してどのように考えるかも知りたいものである。

近い将来の7年後のオリンピックに備えてさまざまな強化策が実施されるであろうが、40数年前の初出場の時にも体格（とくにてのひらと指が長いが大きい！）・体力（彼らは転倒してもショックに強靭な反応力あり、野球がない国柄でシュート技能は抜群に強速・否妻同然！）・試合場でのプレー集中力は文字通りの「飢えたる狼または暴れ馬同然」7年後の東京の会場で気付くならば、文字通りの「泥縄」となる。過去に抜群の敏捷性・瞬発力・持久力などに優れた特徴を駆使して男女とも好成績を残した韓国男女チームの先例（現在はそれほどでもないらしいが）に習うことも重要であろう。

現今のルール解釈と判定基準が細事を問わぬレフェリングになっていることも明らかであるが、ロートルレフェリーの眼には、今世紀になって顕著に激変したと感じる。いわく、攻防ともに個々の力とプレースピードの激突で上記の多くの問題を孕む状況・場面にも耐えるプレーがもてはやされるようになるであろうが、いまや我々が馴染んだハンドボールは確実に「旧来の陋習扱い」にされるのだ。

再三述べ繰り返すが、「Eカップ大会」では攻防時の危険行為・虞犯行為に対するアドバンテージは今後軽視・等閑視されるのではないか？　ユニホームが破損する状態などを勇猛果敢なプレーと勘違いしていると見えるふしあり。攻撃側の9mラインからのフリースローにもこう攻防とも守るべき3m離れるルールを順守させるルール適用にもいい加減に処置されている！　ひたすらプレー進行を優先するのみと見える。私見ではあるが、現行のレフェリングは狩猟民族の血を引く欧米人向きの思考伝統・習慣が裏付けになっているのではあるまいか？　特定の民族や人種の不利益は今後絶対に増大しないと言えるか。前述のように韓国の男女チームは一時期はこの高いハードルを克服したかに見えたが、今後は「欧米による大きな壁」がもっと高いハードルとなるであろう。

4 欧州で最高レベルすなわち世界最強と評される大会では、レフェリーレベルも同等またはそれ以上のレベルとする想像は当然であるが、それでも新たな問題がある今世紀になってから、いかなる事情でルール解釈と実施状態が変容したのかを考えることも無意味ではないと思うが、「Eカップ大会」の如き「桁外れの大会」は番外扱いとして、アジヤ大会すら実現していない国々が今後7年間に克服すべきレベルアップ方策についてチームのみならず、レフェリー部門にも強化策アイデアを策定すべきであるが、この際、機関誌機能の百％活用が望まれる。従来の機関誌は協会方針や行事の太鼓叩きの感があったが、今後はオピニオンリーダーとして激励鞭撻役にも徹底してほしいいものである。日本のハンドボール界にとってまたとない起死回生のチャンスとも言うべき今後の7年間をどう過ごすか、外野席のファンも多くの情報提供を期待している。

過去幾度か提言したと記憶するが、これを機会に機関誌にレフェリー資料など定期的に寄稿欄を設けてはいかがか！　協会の勇断を期待する！

5 再度のオリンピック準備ともなれば、平成16年に神戸で日本協会がIHFのルール・レフェリー委員長シュタインバッハ氏を講師として、神戸で日本全国から百名を超すレフェリング関係者を迎えて神戸で講習会が行われたことを思い出すが、再度記述する。およそ20年ぶりで平成16年の出来事を回顧する意味で、今後7年間で同種の催しが開催されるならば、くれぐれも「前車の轍を踏まぬよう」留意願いたい。関連業務に従事した（当時の審判部長は斉藤氏）人の多くが「消息不詳」で、レフェリー部門ではシュタインバッハ氏の英語による講話の通訳を担当した福島氏は健在だが、この機会にレフェリーOBも微力を尽くす機会としたいものである。

あの時の講演は私も傍聴したが、問題はその講演終了後にシュタインバッハ氏が「今回の講演で、何か意見や質問があれば遠慮なく尋ねられよ」と何度か繰り返したが、全国から参集した百有余人のレフェリー代表者たちで質問を申し出た者は皆無。ついにシュタインバッハ氏は「質問がないということは諸君は私の講話はすべて理解できたのか？　それとも面白くもない興味もわかず、イネムリするほうがましだったのか」と「遺憾の意の発言」があったことははっきり理解できた。欧米人は自身の講演後、質問や意見が皆無ならば自身の努力への「失望あるいは侮辱」と理解するらしいが、それにしても神戸では2時間近くも聴講して、「反応がゼロ同然」ならば、皮肉の一つも言いたくなるのではないか！

余談ながら米国に出向した某教授が言うには、米国では講義や説明の終了後の「関連質問」では、とくに後進国からの留学生は低レベル質問でも「納得するまで説明を求めて」、決してこれを「恥」としない。教授側もそれを当然として懇切に応対するのだと。日本国内では個人的に質問や提議はするが、衆人環視の状態で「言いたい知りたいことを語学力の高低に拘わらず自由に質問する」のは苦手あるいは消極的と感じるが、いかがかと。おこがましいが、私自身は、過去に何回か数十人を対象にカール・ワング、エリック・エリアス、ジョニクンスト・ゲルマネスク氏ら（いずれも東京で）によるドイツ語での講習に協力したが、神戸での催しは、明らかに協会側の準備不足と言える。7年後には必ず実施されるであろう同種の行事で「前車の轍」を踏まぬよう、たとえば、質問担当は、日本列島北から南まで区分けして質問担当役を前もって決めて、外国人との接遇を苦にしない気配りを必修にしてはいかがか。今後のヤング層・学生・プレーヤーも自発的に語学習練に関心を高めて些少でも実際に「文武両道」を体験してはいかがか。この種の努力成功はすべて「度胸」と「根気強さ」に尽きる！

ハンドボールスキルアップシリーズ

目からウロコの シュート術

2月15日発刊／Ｂ５判176ページ　2,000円＋税

もっと得点したい！

シュートがうまくなりたい！

勝ちたい！

スポーツイベント社から、ハンドボールスキルアップシリーズ第1弾『目からウロコのシュート術』が刊行されます（2月15日発刊、発売元／グローバル教育出版）。

ハンドボールのシュートテクニックに特化して編集された本です。

ディスタンスシュート（ロングシュート）、サイドシュート、ポストシュート、カットインシュートの全4章。日本の一流指導者の指導・解説、また一流プレーヤーによる得点するためのコツも掲載されています。

「この1冊であなたのシュートが見違えるほどに変わる」はず。これまでにはなかった「得点するための極意がつまった1冊」です。

一流のプレーヤーは、「ここまで考えて練習し、こんなことにまで注意してシュートを打っているのか」と驚くことは必至。

全国書店、また下記のオンラインショップでお求めください。

お申し込みはオンラインショップ、電話、ＦＡＸ、e-mailで

企画・編集
(株)スポーツイベント
〒101-0047　東京都千代田区内神田2-4-2　グローバルビル4F
TEL：03-3253-5941　FAX：03-3253-5948
e-mail：handball@sportsevent.jp
オンラインショップ URL：http://sportsevent.shop-pro.jp/

スコアルーム

高松宮記念杯男子第56回・女子第49回全日本学生選手権大会

開催期日：平成25年11月23日(土)～27日(水)
会場：甲府市・小瀬スポーツ公園体育館ほか

【男　子】

▼１回戦

早稲田大(関東) 38 (20－11, 18－20) 31 中部大(東海)
福岡大(九州) 34 (14－12, 20－9) 21 立教大(関東)
関西学院大(関西) 38 (21－12, 17－16) 28 金沢大(北信越)
名城大(東海) 27 (10－13, 17－11) 24 法政大(関東)
筑波大(関東) 30 (14－14, 16－13) 27 関西大(関西)
中央大(関東) 22 (11－9, 11－11) 20 岐阜大(東海)
同志社大(関西) 27 (16－12, 11－11) 23 国士舘大(関東)
大阪体育大(関西) 35 (16－10, 19－11) 21 東北福祉大(東北)
日本体育大(関東) 46 (22－7, 24－10) 17 高松大(中四国)
明治大(関東) 32 (14－9, 18－16) 25 近畿大(関西)
福岡教育大(九州) 33 (19－12, 14－19) 31 函館大(北海道)
大阪経済大(関西) 35 (13－6, 22－14) 20 駿河台大(関東)
東海大(関東) 28 (15－10, 13－14) 24 桃山学院大(関西)
日本大(関東) 31 (13－11, 18－14) 25 立命館大(関西)
大同大(東海) 28 (16－7, 12－14) 21 桐蔭横浜大(関東)
中京大(東海) 33 (16－13, 17－14) 27 富士大(東北)

▼２回戦

早稲田大 31 (15－8, 16－14) 22 福岡大
関西学院大 23 (10－6, 13－10) 16 名城大
筑波大 33 (16－10, 17－10) 20 中央大
大阪体育大 39 (19－14, 20－15) 29 同志社大
日本体育大 35 (16－6, 19－14) 20 明治大
大阪経済大 29 (17－12, 12－14) 26 福岡教育大
日本大 27 (13－11, 14－14) 25 東海大
中京大 26 (13－12, 13－8) 20 大同大

▼準々決勝

早稲田大 29 (12－12, 17－10) 22 関西学院大
大阪体育大 27 (12－11, 15－13) 24 筑波大
日本体育大 33 (16－9, 17－20) 29 大阪経済大
中京大 25 (14－14, 7－7) 24 日本大
(2－1 延長 2－2)

▼準決勝

早稲田大 35 (18－14, 17－13) 27 大阪体育大
中京大 29 (19－11, 10－17) 28 日本体育大

▼決　勝

早稲田大 27 (12－13, 15－13) 26 中京大

【女　子】

▼１回戦

早稲田大(関東) 29 (11－8, 18－11) 19 大同大(東海)
大阪教育大(関西) 41 (21－7, 20－9) 16 富山国際大(北信越)
富士大(東北) 27 (17－9, 10－10) 19 環太平洋大(中四国)
東北福祉大(東北) 32 (15－12, 17－14) 26 福岡大(九州)
武庫川女子大(関西) 31 (13－6, 18－8) 14 秋田大(東北)
琉球大(九州) 37 (22－2, 15－5) 7 小樽商科大(北海道)
関西大(関西) 20 (10－13, 10－6) 19 桐蔭横浜大(関東)
茨城大(関東) 35 (20－14, 15－15) 29 環太平洋大短期大部(中四国)

▼２回戦

大阪体育大 34 (18－12, 16－10) 22 早稲田大
日本体育大 24 (14－11, 10－6) 17 大阪教育大
富士大 31 (12－14, 19－9) 23 同志社大
東海大 29 (14－11, 15－10) 21 東北福祉大
中京大 21 (6－7, 15－6) 13 武庫川女子大
筑波大 44 (25－8, 19－10) 18 琉球大
福岡教育大 31 (13－10, 18－8) 18 関西大
東京女子体育大 30 (17－7, 13－5) 12 茨城大

▼準々決勝

大阪体育大 28 (15－9, 13－10) 19 日本体育大
東海大 29 (16－10, 13－11) 21 富士大
中京大 21 (11－11, 10－7) 18 筑波大
東京女子体育大 29 (14－11, 15－14) 25 福岡教育大

▼準決勝

大阪体育大 29 (13－12, 16－6) 18 東海大
東京女子体育大 27 (13－7, 14－11) 18 中京大

▼決　勝

大阪体育大 20 (8－6, 12－9) 15 東京女子体育大

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」11・12月入会・継続会員

【栃　木】坂本定芳【群　馬】河内弘美【埼　玉】星野妙子、岡村昭二、長田健吾【千　葉】山田友美【東　京】橋本　進、浅岡　弦、寺嶋　潔、岡前義春、佐藤俊男、佐藤映子【神奈川】福井俊彦、生熊健二、加古川範子、白井香代子、田原やよい【新　潟】飯田和弘【富　山】吉水慎一【福　井】佐々木輝明、土肥正彦、角谷喜代重【静　岡】坂東廣一、青木美佳【愛　知】佐藤壮一郎、荒川健児、野田　清、坪井夕香、近藤芳明、山本智子、内田元規【三　重】貝沼圭吾、細野秀男【滋　賀】高畠典克【京　都】守本幸三郎【大　阪】赤星　明、西野　誠、山本伸二、西端美重子【鳥　取】足立逸郎【島　根】森江和吉【岡　山】奥埜美峰、奥埜啓子【広　島】白石　隆、田中友紀【熊　本】藤田八郎

【2月・3月の行事予定】

【会議】……………………………………………………

2月8日(土)　第2回理事会
2月9日(日)　第2回全国理事長会
3月15日(土)　常務理事会

【大会】……………………………………………………

2月14日(金)～16日(日)
全日本社会人チャレンジ（山口県・周南市）
3月8日(土)～9日(日)
第38回日本リーグプレーオフ（東京・駒沢体育館）
3月25日(火)～29日(土)
第9回春の中学生選手権大会（富山県・氷見市）
3月25日(火)～30日(日)
第37回全国高校選抜大会
………………………（愛知県・豊田市、岡崎市）

機関誌送付先各位

機関誌：チーム内回覧のお願い（機関誌専門委員会）
協会機関誌は、大会報告を始め種々の協会情報を掲載し年８回発行しております。
送付先は、各チーム登録の監督・指導者等となっておりますが、指導者のみならず、選手にも読んで戴きたい記事も在りますので、チーム内の選手にも是非回覧戴ければと存じます。

HAND BALL CONTENTS Jan. Feb.

（公財）日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第五四一号

平成二十六年一月二十六日印刷
平成二十六年二月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表 〇三―三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二一九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円